

令和3年度第1回古賀市文化財保護審議会

会議次第

令和3年6月28日（月）
14時00分から
リーパスプラザこが歴史資料館
中会議室

1. 開会の言葉
2. 会長あいさつ
3. 報告事項
 - (1) 令和3年度船原古墳調査・活用事業について
4. 議事
 - (1) 古賀市指定文化財候補物件の現地視察等
案件：千鳥ヶ池のツクシオオガヤツリ
旦ノ原の井戸
青柳村兵事資料
5. その他
 - (1) 令和3年度第2回文化財保護審議会開催日程について
6. 閉会の言葉

3. (1) 令和3年度船原古墳調査・活用事業

ア. 調査

(ア) 出土品クリーニング

今年度は昨年度に引き続き1号土坑出土の小札甲のクリーニングを実施する。対象とするのは取り上げ時の塊39ブロック分で、九州歴史資料館にて作業を行なっている。

(イ) 出土品実測

昨年度に引き続き、1号土坑出土の小札甲とこれ以外の馬具等についてそれぞれ実施する。実測図では、遺物の形状や構造を示すことに加えて、その埋納状況の復元に必要な有機質の情報を提示することを目的としている。

(ウ) 3Dデジタルデータ詳細解析

遺物の出土状況の検討及びその図化のために、取り上げ後の遺物のCTデータから作成したSTLデータを遺物出土状況の三次元計測データと統合し、三次元図面(アプリ)を製作する。今年度は、鉄鏃束の一部について実施する。

また、鉄鏃束については、矢として何らかの容器に入れられた状態、あるいは何かで束ねられた状態で土坑に入れられた可能性が想定され、その束の単位や埋納時の状態は1号土坑の遺物埋納状況解明の一つの重要な要素であり、その検討のためにCTデータの詳細解析を実施する。今年度は鉄鏃束の周辺に容器等に関する痕跡が確認できるかどうか分析等を行なう予定である。

(エ) 出土遺物実測図製図業務委託

昨年度までに作成した遺物実測図のうち、130点程度のデジタルトレースを委託する予定である。

(オ) 遺物付着有機質検討

土坑出土遺物には皮革や木など多量の有機質遺物の痕跡が付着している。それらは、金属遺物とあわせて製品を構成していたものやそれを納めていた容器等の痕跡であり、土坑の遺物埋納状況を検討する上で重要なものと考えられるため、その種類等について調査を行なう。

(カ) 古墳時代以外の出土品整理

古墳時代以外の遺構及びその出土品整理を実施する。今年度は報告書刊行に向けて遺構図の整理及び製図作業を中心に行なう。

(キ) 『船原古墳Ⅲ』作成

1号土坑以外の遺構及び遺物(主に2号土坑、3号土坑、古墳時代以外の遺構)についての報告書を作成する。

イ. 活用

(ア) 船原古墳解説映像制作

調査の過程で得られた三次元データを利用してこれまで作製してきた遺物の復元CG等を活用して船原古墳の解説映像を作り、歴史資料館や市ホームページ等で公開して多くの人に遺跡のことを知り、理解してもらうことに役立つ。

(イ) 出土品製作体験キット作製

令和2年度に報道発表を行なった二連三葉文心葉形杏葉について、自身で組み立てられる体験キットを作製する。成果物は、歴史資料館等で実施する講座で活用し、参加者が体験を通じて遺物の構造、価値等について学ぶことができるようにする。

(ウ) 令和3年度船原古墳展

今回は、これまでの調査の中でどのように様々なことが分かってきたのかという切り口から船原古墳を紹介する。緊急時代宣言発令の影響で歴史資料館が6月20日(日)まで休館となったため、開始日を6月22日(火)からに変更し、7月18日(日)までは一般向けの内容のものを、7月20日(火)～8月22日(日)の小中学校の夏休みに重なる期間には、子ども向けにアレンジしたものを実施する。

(エ) 報道発表

昨年度の調査でその形態が明らかになってきた1号土坑出土冑について、その事実関係と歴史的 position について報道発表する。9月頃実施する計画である。

(オ) 講演会

報道発表を受けて、冑の調査成果を市内外に広く周知するために古賀市で講演会を実施する。文化課職員からの報告に加えて、浜松市の鈴木一有氏を招き冑についての専門的な講演もしていただく。発表資料については資料集として印刷製本し配布する。また、昨年度同様、講演会のウェブ配信を実施する。10月23日開催予定。

(カ) 小札甲復元製作ワークショップ

上記報道発表や講演会を受けて、冑の模型を製作する子ども向けワークショップを開催する。出土品に関する説明と、厚紙等から頭頂部の伏鉢と縦矧板からなる鉢部のパーツをつなぎ合わせる作業を通じて、出土品について学んでもらう内容とする。11月開催予定。

4. (1)

ア. 千鳥ヶ池のツクシオオガヤツリ

千鳥ヶ池は、環境省の「生物多様性の観点から重要度の高い湿地(略称『重要湿地』)」に選定されており(「日本の重要湿地 500『重要湿地整理番号 457 古賀市および福津市のため池群』)、多様な生物が見られる。

ツクシオオガヤツリは、環境省絶滅危惧 I B 類(1 A 類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの)、福岡県レッドデータブック絶滅危惧 I B 類に評価され、福岡県内では福岡市、小郡市、そして古賀市に自生地が知られている。別添資料、筒井氏のレポートでは「ツクシオオガヤツリが古賀町に自生していることは、古賀町民が世界に大きく誇り得る事実である」と記されており、非常に貴重であることから市指定文化財候補として挙げるものである。

イ. 旦ノ原の井戸

古賀市の北部、旧唐津街道沿いにあり、文久 3 年竣工の井戸である。県道の拡幅工事により、2 度移転しているが、井戸、顕彰碑、そして梅の木 1 本はまとめて移転されている。石組み井戸で、上部の井戸枠は当時の状態のまま使用。ただし、これより下位の石組みはナーバーリングして解体・組み上げたわけではないため当時の状態ではない。移転しているとはいえ、大きな移動ではなく、旧唐津街道沿いにあり、当時の景観を留め、そして歴史的事実を示す資料であることから市指定文化財候補として挙げるものである。

ウ. 青柳村兵事資料

古賀市は、昭和 30 年に旧古賀町、青柳村、小野村の三か町村が合併して誕生した(古賀町。その後、平成 9 年に市制施行)。古賀市が所蔵する青柳村行政資料は目録化されたもので 3,643 点、この内、兵事関係資料は 56 点ある。行政資料は多くは廃棄されて残存しておらず、とりわけ兵事関係資料は、戦後、率先して焼却処分の対象とされたとされる。古賀市が所蔵する行政資料も、青柳村分以外は残存していない。現在残る青柳村の兵事関係資料も欠落を生じている資料ではあるが、残存している例自体が少なく、貴重な 1 次資料であることから市指定文化財候補として挙げるものである。

絶滅危惧植物図鑑

レッドデータプランツ 増補改訂新版

2015年3月15日 初版第1刷発行

監修——矢原徹一・藤井伸二・伊藤元己・海老原淳

写真——永田芳男

発行人——川崎深雪

発行所——株式会社 山と溪谷社

住所——〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1丁目105番地

<http://www.yama-kei.co.jp/>

■商品に関するお問合せ先

山と溪谷社カスタマーセンター 電話 03-6837-5018

■書店・取次様からのお問合せ先

山と溪谷社受注センター 電話 03-6744-1919 FAX 03-6744-1927

印刷・製本所——大日本印刷株式会社

Copyright©2015 Yama-Kei Publishers Co., Ltd. All rights reserved.

Printed in Japan

ISBN978-4-635-09045-2

* 乱丁・落丁本は送料小社負担でお取替えいたします

* 定価はカバーに表示してあります 禁無断転載

カヤツリグサ科	ゲンカイモエギスゲ	絶滅危惧 IB 類
<i>Carex genkaiensis</i> Ohwi		2001: 絶滅危惧 IB 類, 環境省: 絶滅危惧 IB 類
選定理由	ダム工事などにより生育地を狭められつつある。[1]	
危機要因	ダム建設	
分布情報	直方市に数カ所の自生地がある。この地域が本種の基準産地である。	
種の概要	山地の疎林内, 林縁に稀に生育する多年草	
特記事項	北九州国定公園指定植物	

カヤツリグサ科	ヤガミスゲ	絶滅危惧 IB 類
<i>Carex maackii</i> Maxim.		2001: 絶滅危惧 IB 類, 環境省: 一
選定理由	湿地の減少に伴い, 本種の自生地・個体数も減少傾向にある。	
危機要因	湿地開発	
分布情報	鞍手郡, 大牟田市, 北九州市	
種の概要	河川敷などの湿地に生育する多年草	
特記事項	特になし	

カヤツリグサ科	ヒメスゲ	絶滅危惧 IB 類
<i>Carex oxyandra</i> (Franch. et Sav.) Kudô		2001: 絶滅危惧 IB 類, 環境省: 一
選定理由	山地の林内, 草地に生育するが, 本県に限っていえば, 高い山の尾根筋に細々と生育している。県内では希少種であり, 絶滅が危惧される。[1]	
危機要因	産地局限	
分布情報	福岡市, 添田町, 宇美町	
種の概要	山地の林内, 草地に生育する多年草。本県では, 山地の尾根筋に細々と生育している。	
特記事項	特になし	

カヤツリグサ科	ツクシオオガヤツリ	絶滅危惧 IB 類
<i>Cyperus ohwii</i> Kük.		2001: 絶滅危惧 IB 類, 環境省: 絶滅危惧 IB 類
選定理由	福岡市(23カ所), 古賀市(1カ所), 小郡市(1カ所)の25カ所に自生地があり, 中には1万株以上の大群生地が6カ所あったが, 堀や池の浚渫工事, 公園整備名目の埋立で6カ所とも100株以下まで減少あるいは絶滅し, ここ30年間の開発により個体数は1%に減少している。[1]	
危機要因	土地造成	
分布情報	福岡市, 古賀市, 小郡市。福岡市が基準標本産地(1909年発見)。	
種の概要	堀や池に生育する。短い地下茎からそう生ずる。高さ1.5mに達する大型の多年草。	
特記事項	県指定天然記念物	

カヤツリグサ科	スジヌマハリイ	絶滅危惧 IB 類
<i>Eleocharis equisetiformis</i> (Meinsh.) B.Fedtsch.		2001: 絶滅危惧 IB 類, 環境省: 準絶滅危惧
選定理由	北九州市若松区, 遠賀町, 若杉山, 広川町, 八女市に6カ所の標本産地があるが, 現存するのは若松区の1カ所だけで, 現状不明である。現存産地は埋立地内の湿地で5m ² の群落があるのみ。土地が処分されると, 開発により消滅する懸念が大きい。[1]	
危機要因	湿地開発	
分布情報	北九州市若松区	
種の概要	砂質の淡水湿地に生育する多年草	
特記事項	特になし	

福岡県の希少野生生物

福岡県レッドデータブック 2011

—植物群落・植物・哺乳類・鳥類—

平成23年11月発行

制作・発行 福岡県環境部自然環境課
〒812-8577 福岡市博多区東公園7番7号
TEL 092-643-3367 FAX 092-643-3357
shizen@pref.fukuoka.lg.jp

業務委託 財団法人九州環境管理協会
〒813-0004 福岡市東区松香台1丁目10番1号
TEL 092-662-0410 FAX 092-662-0424

印刷 白木メディア株式会社 福岡本社
〒812-0041 福岡市博多区吉塚6丁目5番28号
TEL 092-623-8355 FAX 092-624-1706

25. ツルナシコアゼガヤツリ PL. 267

Cyperus haspan L. var. *microhaspan* Makino
 コアゼガヤツリに似ているが、根茎は伸びず、叢生し、鱗片は小さく、長さ1-1.2mm。本州（関東以西）・四国・九州・南西諸島、マレーシアに分布する。ヒメガヤツリ（ミズハナビ）とされているものは本種のことが多い。

26. ヒメガヤツリ〔ミズハナビ〕 PL. 267
Cyperus tenuispica Steud.

ツルナシコアゼガヤツリにたいへんよく似て、ときに区別が難しいことがあるが、小穂は成熟するとやや黄褐色の部分があって、小軸が一部現れ、鱗片は小さく、長さ0.6-1mm、鈍頭で、先は少し反り返り、葯の上端には小刺がないので区別される。8-11月に熟す。本州~琉球、旧世界の暖地に分布する。

27. スマガヤツリ PL. 267
Cyperus glomeratus L.

湿地に生える丈の高い一年草。茎は肥厚し、高さ20-80cm、葉は幅3-7mm。花序は単純または1回分枝し、長さ3-10cm。苞は3-4個あって、花序よりも長く、穂状小花序ははなはだ多数の小穂を密生する。小穂は中軸に斜上またはやや平行し、線形で長さ5-10mm、幅1.5mm、さび褐色。鱗片は狭長楕円形で、やや鈍頭、竜骨は鋭い。果実は鱗片の長さの半分位、狭長楕円形。9-10月に熟す。本州（関東以西）、朝鮮半島・中国・アムール・インド・ヨーロッパに分布する。和名はその生育場所に由来する。

28. カンエンガヤツリ PL. 268
Cyperus exaltatus Retz. var. *iwasakii* (Makino) T. Koyama

湿地にまれに生えて群落をつくる。根茎は太くて短い。茎は太く、高さ80-120cm、葉は幅8-15mm。花序は大型で長さ幅とも10-30cm、苞は4-5個ついて、花序よりも長く、葉状、枝は長さ20cmになる。穂状小花序は長さ幅とも1-1.5cm。小穂は密について開出し、長さ5-10mm、扁平で黄褐色をおび、鱗片は卵形で長さ1.7-2mm、竜骨は緑色で、先端が突出してわずかに外曲する。果実は長さが鱗片の半分、楕円形。9-10月に熟す。本州、朝鮮半島・中国に分布する。和名は江戸末期の本草学者・岩崎灌園にちなむ。また朝鮮半島では〈莞草（ワングル）〉の名で栽培し、その茎を編んで敷物などに利用する。基本種 var. *exaltatus* はインドからインドネシア・オーストラリアに分布する。

29. ウシクゲ PL. 268
Cyperus orthostachyus Franch. et Sav.

湿地に多く、田のあぜなどによく見かける一年草。茎は高さ20-70cm、葉は幅2-8mm、花序はやや大型で長さ5-20cm、5-7個の不同長の枝がある。小穂は線形、やや扁平で、長さ5-10mm、幅1.5mm、濃血赤紫褐色。鱗片は広楕円形で、長さ約1.2mm、円くて全縁である。果実は鱗片よりわずかに短く、倒卵形。8-10月に熟す。北海道~九州、朝鮮半島・中国・シ

ベリア東部に分布する。全草をもむとレモン様の芳香がある。

30. チャガヤツリ PL. 268
Cyperus amuricus Maxim.

カヤツリグサによく似た一年草であるが、小穂は長さ7-12mm、幅1.5-2mmでやや幅広く、開出して、赤褐色をおびる。鱗片は広倒卵形で、長さ1.5mm、円頭で、緑色の中肋は突出して、やや外曲する明白な突起になる。8-10月に熟す。本州~九州の畑地や中性の荒地などカヤツリグサやコゴメガヤツリ *C. iria* が生えるようなところに生えるが、それらほど多くはない。国外では朝鮮半島・中国・アムール・ウスリーに分布する。和名はその小穂の色にちなむ。

31. カヤツリグサ〔キガヤツリ〕 PL. 268
Cyperus microiria Steud.

畑地や中性の荒地などに多い。コゴメガヤツリ *C. iria* によく似ているが、穂状小花序の中軸や、小穂の小軸は翼があり、小穂は長さ7-12mm、幅1.5mm位、開出し、帯黄色または帯黄褐色、鱗片は長さ1.5mm位、円頭で緑色の中肋はコゴメガヤツリより長く突出し、明らかな突起となる。8-10月に熟す。本州~九州、朝鮮半島・中国に分布する。和名は〈蚊帳吊草〉で、三角形の茎をそれぞれ異なった面について裂くと、真ん中あたりで四角形ができるが、これを蚊帳を吊った形に見立てたため。

32. コゴメガヤツリ PL. 268
Cyperus iria L.

畑地や中性の荒地にふつうに生える一年草。茎は高さ20-60cm、葉は幅2-6mm。花序は長さ15cmになり、枝は3-5個あって不同長。苞は2-3個ついて、葉状。小穂は多数で斜開して密につき、線形で、長さ5-10mm、幅1.5mm、帯黄色。鱗片は広倒卵形で、長さ1-1.5mm、緑色の中肋は上端のへこみを越えてわずかに突出する。果実は鱗片よりわずかに短く倒卵形。8-10月に熟す。本州~琉球、朝鮮半島・中国・台湾・インド・マレーシア・オーストラリア・アフリカに分布する。和名は〈小米蚊帳吊〉で、その鱗片が小さいため。

33. ツクシオオガヤツリ PL. 268
Cyperus ohwii Kük.

福岡県の池畔の湿地に生える。千葉県にもある。根茎は太くて短い。茎は太く、高さ1-1.5m、基部は肥厚する。葉は幅1-1.5cm。花序は大型で、よく分枝し、長さ幅とも10-20cm。苞は3-5個あり、葉状で花序よりも長い。穂状小花序は円柱形で密に多数の小穂を斜開してつけ、小穂は長さ4-6mm、淡黄色で、少し扁平である。鱗片は楕円形、長さ約2mm、鋭頭、果実は長さが鱗片より少し短く、狭卵形、9-10月に熟す。インド・インドネシアにも分布する。

34. オオホウキガヤツリ
Cyperus digitatus Roxb.

琉球（沖縄島・宮古島・石垣島・西表島・与那国島）、台湾・中国・インド・世界の熱帯に広く分布。

改訂新版 **日本の野生植物 1**

ソテツ科～カヤツリグサ科

2015年12月17日 改訂新版第1刷発行

編者 大橋広好 門田裕一 木原 浩
 邑田 仁 米倉浩司

発行者 西田裕一

発行所 株式会社平凡社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-29

電話 03(3230)6583 (編集)

03(3230)6572 (営業)

振替 00180-0-29639

ホームページ <http://www.heibonsha.co.jp/>

製版印刷 株式会社東京印書館

多色刷用紙 王子製紙株式会社

本文用紙 北越紀州製紙株式会社

表紙クロス ダイニック株式会社

製 本 大口製本印刷株式会社

製 函 永井紙器印刷株式会社

© 株式会社 平凡社 2015 Printed in Japan
ISBN978-4-582-53531-0 NDC分類番号470.38
四六倍判(19.2×26.2cm) 総ページ666

落丁・乱丁本はお取り替えいたしますので、
小社読者サービス係までお送りください(送料小社負担)。

その後は各分野の調査担当者及び協力者が現地調査（聞き取り調査を含む）及び文献調査を行い、調査結果及び自然環境の保全に関する提言をとりまとめた。

最終的に、分野別の調査結果を踏まえて古賀市の自然環境を総合評価するとともに、分野別の提言内容をもとに全体的な提言をとりまとめた。

(4) 自然環境の評価

まず、各分野の担当者が現地調査及び文献調査の結果をもとに、①希少性（天然記念物指定、環境省レッドデータブックや福岡県レッドデータブック掲載種など）、②自然性、③生物の多様性、④学術的価値、⑤教育的価値、⑥レクリエーション的価値等を総合的に判断して古賀市の自然環境をAからCまでの3ランクに分けて評価した（哺乳類、鳥類、は虫類・両生類では5から6ランクに細分化している）。

次に、これらの分野別評価結果に生物の生息環境のベースとなる植生自然度の評価を加えて、古賀市の自然環境を総合評価した（詳細は第12章に示す）。

2. 古賀市の自然環境の概要

(1) 地形・地質

古賀市の地形は、海浜・低地（沖積地）・台地（段+丘）・丘陵地・山地に分けられる。海浜・低地（沖積地）・台地（段丘）をつくる地質は、西部・北部・南部に分布しており、新砂丘砂層・沖積地構成層・段丘構成層と呼ばれる。

北部・中部・南部の丘陵地は古第三紀堆積岩類（頁岩・砂岩・礫岩）と花崗岩類（花崗閃緑岩）からなる。東部の山地は中生代堆積岩類（頁岩・砂岩）・変成岩類（結晶片岩・蛇紋岩）から構成されている。西部と南西部は緩やかな丘陵といくつかの突出した浸食残丘からなる老年期地形である。

市内の河川は大根川水系に属しており、河川に沿って低地（沖積低地）や台地（河岸段丘）が見られる。古賀市域には堆積面（段丘面）の高さの異なる3種類の段丘（低位段丘・中位段丘・高位段丘）があり、段丘面をつくっている地層は玉石質の砂礫で、古いものほど風化している。

古賀市の西側は玄界灘に面しており、玄海砂丘と呼ばれる海岸砂丘が存在する。玄海砂丘は新砂丘と古砂丘からなるが、古賀市に分布するものは新砂丘のみである。

(2) 植生

市の東南部は山地で、針葉樹人工林、竹林、照葉樹林などの樹林がモザイク状に分布する森林となっており、中央部の低地と丘陵地には水田、畑地、果樹園が分布する。西北部の低地は市街地であるが、玄界灘に面した海岸部には砂丘植生と海岸黒松林が見られる。このほか、鹿部山のタブノキ林、岳越山のスタジイ、アラカシ、タブノキの混生する照葉樹林も二次林ではあるが高い自然性を持っている。大根川河辺には、上流域にツルヨシ群落、下流の湛水域にはヨシ群落が、いずれも自然性の高い群落と評価されている。また、千鳥ヶ池のヨシ群落には、福岡県レッドデータブック絶滅危惧ⅠB類に選定されているツクシオオガヤツリが混生しており、「千鳥池の水生植物群落」として環境省特定植物群落に選定されている。

あるため、福岡県レッドデータブックカテゴリーⅡ（対策を講じなければ群落の状態が徐々に悪化する）に選定されており、保全が望まれる。

4) 河辺冠水草原

No. 7 : 大根川 ツルヨシ群落

大根川上流域の河辺に成立するツルヨシが優占する草本植物群落。群落高 1.8m になり、草本第 1 層はツルヨシが密生し、カナムグラ、ヤブガラシ、ヤブマメなどのつる性草本が見られる。草本第 2 層は、これらのつる性草本、ミゾソバ、セリなどの湿生植物が混生するが、構成種は比較的少ない。

5) 湿生草原

No. 8 : 大根川 ヨシ群落

大根川下流の湛水域に成立するヨシが優占する草本植物群落。群落高 2m に達し、草本第 1 層はヨシが密生し、つる性草本のヤブガラシを伴う。草本第 2 層にはミゾソバ、セリなどの湿生植物、ヤブガラシ、カナムグラなども見られるが、出現種は少ない。流水側には水生植物のマコモやオオフサモも生育している。

No. 9 : 大根川河口 ヨシ群落

大根川河口右岸に成立するヨシが優占する草本植物群落で、塩沼地後背の砂地に成立する。草本第 1 層はヨシのみが出現し、植被率 80% とやや疎らに生育している。草本第 2 層は、主として海岸砂地植物で構成され、イソホウキギが優占する。次いでオカヒジキ、アキノミチヤナギの被度が高く、ツルナ、ホソバハマアカザ、ホコガタアカザなどが混生する。

No. 10 : 千鳥ヶ池 ヨシ群落

千鳥ヶ池の池岸に見られるツクシオオガヤツリが混生するヨシ群落。No. 10-1 は、池西岸の群落で、ヨシが優占し、次いでウキヤガラ、ガマ、セリの被度が高く、ツクシオオガヤツリ、アゼナルコ、マコモなどが生育している。No. 10-2 は、池東岸の群落で、ヨシが優占し、シロバナサクラタデ、ツクシオオガヤツリ、セイタカアワダチソウなどの被度が高く、ウキヤガラ、ヒメガマ、マコモなどが混生する。千鳥ヶ池は、県内ではまれな天然湖沼で、ツクシオオガヤツリやイヌタヌキモなどが生育していることから、「千鳥池の水生植物群落」として環境省特定植物群落に選定されている。また、ツクシオオガヤツリは、福岡県レッドデータブック絶滅危惧ⅠB類（近い将来における野生での絶滅の危険性が高い種）に選定されている希少植物である。

古賀市自然環境調査報告書

調 査：古賀市自然環境調査研究会
調査・編集協力：財団法人 九州環境管理協会
編 集・発 行：福岡県古賀市市民部環境課
〒811-3192 福岡県古賀市駅東1丁目1番1号
TEL 092-942-1111 FAX 092-942-3758
発 行：平成16年3月

ツクシオオガヤツリ 中央区

印刷する



指定	県指定
区分	記念物
種別	天然記念物
所在地	福岡市中央区城内 福岡城堀内
時代	その他
所有者	福岡市

紹介文

ツクシオオガヤツリはカヤツリグサ科カヤツリグサ属の多年草の一種である。我が国では極めて珍しい植物で、福岡城のお堀で最初に発見されたため、和名にツクシ（筑紫）の名が冠され、また他のカヤツリグサ類に比べて、著しく大型のためツクシオオガヤツリと呼ばれるようになった。分布が極めて限られるため発見されてから、長く植物学者の関心を集めていた植物である。

秋には地上部が枯死するが、地下茎は生きていて春には叢生し、茎は高さ1～1.5mに伸び三稜形をしている。カヤツリグサ科は茎が三稜なのが特徴であり、これを両端から裂くと二裂せず、四辺形をつくり、その形が蚊帳を連想させることから一般名としてカヤツリグサの名前が古くからあった。その仲間はカヤツリグサ科として分類学でまとめられているが、世界には5000以上の種があるとされるほど大きな科であり、日本では属で20以上、カヤツリグサ属だけでは25以上の種が分布している。

それらの中で特に大型なのがツクシオオガヤツリである。9月から10月に稈の先端から大きい穂が出て種子を作り、多量に散布される。湿生地、堀、治、池の泥土に好んで生育し、大きな株をつくって繁茂する。

明治39年9月1日、世界で初めて福岡城のお堀で発見された植物ということで特に福岡市の植物研究者の関心をひいてきた植物であり、研究もされてきた。

明治39年当時東京帝国大学理科大学の助手であった牧野富太郎氏が采福して指導した植物夏期講習会の折、福岡城のお堀で一行が発見し、牧野氏が仮にツクシガヤツリと命名しその後、昭和6年に植物学者大井次三郎氏が当時のカヤツリグサ属の権威であったドイツのキューケンタール氏に標本を送付したところ、新種と鑑定され、大井の名をつけた新しい学名が与えられ和名もツクシオオガヤツリとなったという。この基準標本は福岡城の堀から採取されたものである。

熱帯のマレーシア、インド、インドネシアなどで限られた分布があるというが、それ程広い地域ではなく、我国ではほとんど福岡市に限られている。原産地発見地の城内の堀の他に城南区、東区、南区、早良区などのため池に発見されているが、環境に神経質で、泥土の環境が変わると消滅することも多く、また他種との競合にも弱い。従って発見以後、消滅したり、再び増殖したり、新しい分布地が見付かったりしてきた。

天然記念物としては城内の堀に分布するツクシオオガヤツリということであるが、堀の清掃その他による環境変化で、分布は一定しない。平成元年の調査では、裁判所に向って左側の濠に3株、右側の濠に4株、福岡城西南角で護国神社前の小池に25mほどが残存しているに過ぎない。城前面の7株は市の保護の下で管理されているものであり、西南角小池はショウブ池とし種々人為が加えられた水面の縁に生き残っていて、いずれもかなり不安定な植生である。

地図

ツクシオオガヤツリの発見地の現状と分布

— 種子植物ノート(1) —

筒井貞雄*

1. 前 書

ツクシオオガヤツリは福岡市にとってはいろいろな意味で象徴的な植物である。同じく象徴的な意味で価値がある植物には、立花山クスノキ原始林（国指定特別天然記念物）や博多が和名に採用されたハカタシダがあるが、福岡市がかけがえのない発見地である点ではツクシオオガヤツリには及ばない。更に世界的視点に立てば、旧福岡城のお濠が基準標本の産地である上に、世界並びに日本における分布が極めて限られているので、国の天然記念物に指定されるだけの価値のある植物である。昭和32年に県が天然記念物に指定したにもかかわらず、雑草同様に焼却されたりしており、保護されて来たとは言えない。福岡市当局や市民の評価や関心が低いと思われるのは非常に残念である。ここではツクシオオガヤツリについての経過と現状、並びに分布と保護対策をまとめた。

この報告をまとめるに際しては資料提供の上多大のご教示を下さった山永立木先生、九州大学農学部栽培学教室の泉和一・箱山晋両先生、初島住彦博士、長田武正博士、福岡野鳥の会の木下英彦・村松成子両氏、所蔵標本の閲覧検討を許された京都大学理学部植物学教室、九州大学農学部栽培学教室、同学部造林学教室、同大学熱帯農学研究センターの関係各位、茨城大学教育学部生物学教室の鈴木昌友教授、秀れた線画を完成された益村聖氏、現地調査に協力して下さった永田知恵子・平石禧輔両氏には厚くお礼を申し上げます。

2. 発見時の事情

ツクシオオガヤツリは明治39年9月1日、世界で初めて旧福岡城のお濠で発見されたカヤツリグサ科の1種である。同年の8月26日から30日にかけて牧野富太郎博士（1862～1957）（当時は東京帝国大学理科大学助手）指導の第1回植物夏期講習会が古処山と英彦山で開かれた。同会終了後の9月1日（土曜日）は、同会開催の世話をした東作太郎（当時は福岡県師範学校教諭）の案内で、牧野博士や田代善太郎（1872～1947）（当時は長崎県高等女学校教頭、後の京都大学嘱託）等は、福岡市の西公園から旧福岡城のお濠まで歩かれた。この時に一行がお濠端で発見した大形のカヤツリグサ属の1種は日本においては未知の植物であったから、東氏の求めに応じて牧野博士が仮に「ツクシガヤツリ」と命名されたのが、ツクシオオガヤツリ誕生の発端であった。¹⁾²⁾ その時に牧野博士は同種がインドに産すると言われた由であるが、²⁾ 厳密な学名の考定はなされずに20年余りが経過したようである。

京都帝国大学理学部植物学教室初代教授の小泉源一博士（1883～1953）は福岡市の土岐義順（1893～1963）（当時は修猷館中学教諭）からツクシガヤツリの生品を入手して

* 福岡市南区平和2丁目11の8（〒815）

益村聖福岡県産主要植物図譜 (2)



(1) ツクシオオガヤツリ *Cyperus Ohwii* Kükenthal (本文 97 ~ 116 頁参照)
 粕屋郡古賀町千鳥ヶ池産栽培品 1. 全形 (× 1/4) 2. 花序の枝 (× 1) 3. 小穂 (× 5)
 4. めしべ (× 10) 5. おしべ (× 10) 6. 果実の全形と横断面 (× 10)

栽培の上標本を作成されていた。昭和5年京都帝大を卒業してスゲの研究を始められた大井次三郎博士(1905~1977)(後に国立科学博物館勤務、「日本植物誌」の著者)は、小泉教授の勧めでツクシガヤツリの標本を当時カヤツリグサ属の研究を行っていたドイツのG. Kükenthal(ゲオルグ・キューケンタール)(1864~1956)に送付されたところ、折り返し新種 *Cyperus Ohwii* Kükenth. と名付ける旨の返事があり、昭和6年に発表された。³⁾

このようにしてツクシオオガヤツリは福岡城のお濠端で発見されてから25年目にやっと新種として誕生し、世界の植物学会に紹介されることになったのである。京都大学理学部植物学教室の標本室には、大井博士送付標本の控えが3枚保存されている。これらが貴重なツクシオオガヤツリの複基準標本(Isotype)で、ラベルの採集年月日は1928年9月2日、採集者は土岐義順、産地は福岡市となっている。産地の福岡市はもちろん福岡城のお濠のことである(写真1)。

3. 発見地におけるツクシオオガヤツリの変遷と現状

明治39年に発見されて20年を経過した昭和初頭の福岡城のお濠では、旧電車通りの上の橋から下の橋(現在の平和台前バス停から大手門バス停に当る)間の岸辺及び水中にはおびただしく群落を作って繁茂していたが、昭和10年に都市計画に基づき電車通りの岸が整理され、濠内は浚渫されて海水が入れられたために、ツクシオオガヤツリは全部枯死全滅し取り除かれた。昭和11年当時は福岡城と西側に位置する太濠公園との境界の溝と城の西南に位置する濠(現在の6号濠)にわずかに残るのみになった。²⁾ その状況を当時の福岡県の天然記念物調査委員の山崎又雄(1877~1969)は「つくしがやつりが九州の代表古語筑紫の名をつけられて福岡市の濠にのみ産し雑草として繁茂し居たりしも何の用途もなく風致をも害するのみにて駆除されるは当然なるも学術上分布上世界唯一の珍植物最大の莎草の絶滅を見るは誠に遺憾の次第にて今僅かに残る十数株は是非天然記念物として保存し保護を加え繁茂せしめんことを切に望む」(原文のまま)と書かれている。この昭和10年はツクシオオガヤツリにとっては最初の受難の年であった。

昭和11年に山崎又雄のツクシオオガヤツリについての天然記念物調査報告書が公表されたが、どのような理由に基づくのか天然記念物には指定されなかった。昭和32年8月5日付で県が天然記念物に指定するまでの戦中戦後の状況は資料がなくて殆んど知ることができない。しかし、この20年余りの間に全滅した北濠(1号濠~5号濠)のツクシオオガヤツリは再生し、徐々に回復していたものと推測される。昭和28年秋、ツクシオオガヤツリの自生地に大井次三郎博士を案内された長田武正博士のお話しでは、当時のお濠の中には株を数えきれない程に豊富に自生していたとのことである。戦時中及び戦後の混乱期にはお濠の中までは行政の手は及ばず、自然のままに放置されたことが、ツクシオオガヤツリにはかえって幸したと言うべきであろう。

昭和32年に福岡県文化財専門委員佐藤敬二と福岡県教育委員会主事麻生繁樹が連名で書いた県の天然記念物指定の調査報告は、山崎の調査報告書(昭和11年)があるにもかかわらず、発見や命名時の事情には触れていないのみならず、指定理由、指定時のツクシオオガヤツリの状況(株数、指定範囲)、指定後の保護措置等については全然言及はしていない。同報告書は要領を得ない解説に過ぎず、学術資料としての価値は全くと言って良い程に認めることはできない。調

査報告書としての体裁や内容を備えていない資料で県の天然記念物に指定されたという杜撰さが保護措置の不充分さを導き、その後のツクシオオガヤツリ焼却という事態を招く遠因にもなったと言えるのではないかと思う。

県の天然記念物に指定されながらもツクシオオガヤツリの重ねての故なき受難の歴史は、昭和32年以降、20数年に亘って殆んど独力でツクシオオガヤツリを守ることに力を尽して来た山永立木（元福岡市立女子高校教諭）の研究報告中の証言に詳しい。次に同氏の「福岡市に於ける特殊生物の生態的研究（第5回）」（昭和53年）から福岡城の各濠のツクシオオガヤツリの盛衰の経過を抄録引用し、併わせて現状（昭和56年10月）を記録する。

(1) 1号濠（福岡高裁前）（東西約83m、南北約60m、以下全て山永の記録による）

〔経過〕昭和40年3月の福岡市当局による濠の大整理と共にツクシオオガヤツリは全滅したが、10年目の昭和50年11月9日に北岸の一隅に稚株が見出された。

〔現状〕昭和56年10月の調査では、稚株は6年近くを経過して大きな株に生長している。同株は岸辺に接近しており、護岸のコンクリート杭は株を避けて設けられたが、岸に近い分けつは枯死している。更に濠の東岸の中程から数mの所に新しい株が生じており、大きなハスの葉に囲まれて株自体が横倒しになっているので、10月12日に福岡市教育委員会文化財管理係に状況を通報し改善をお願いしておいた。

(2) 2号濠（福岡高裁と平和台野球場への道に挟まれた濠）（東西約75m、南北約60m）

〔経過〕昭和32年当時は安定した数株（筆者註、ここに言う株は普通に言う1本、2本と数える根茎1個の1株ではなく、根茎が分けつを重ねた結果、花茎が2、30本も出ているような大きな株を意味する）が点在していた。昭和35年福岡市当局（奥村市長時）は3号濠に白鳥などの水鳥を浮かせる計画を立て、ツクシオオガヤツリの2号濠への移植を県に申請した結果、県の文化財専門委員会はそれを認めた。この時は3号濠の中心部の最大の群落の一部が掘り上げられて、2号濠の8アール位の広さに整然と移植されたが、ツクシオオガヤツリは安定して生長することはできず、マコモ・アシなどの侵入を受けて次第に衰微して極少となってしまった。そこで昭和42年市当局は2号濠を全部底浚えして、残ったツクシオオガヤツリを濠の東南部の1個所に1アールの広さに集めたが、ここもアシとマコモの侵入を受けて、昭和52年当時は殆んど全滅。他方、昭和45年7月市当局は九州大学農学部の協力を得て移植実験（土管30本への植え込み）をしたが、同52年8月当時は2株が残存するだけになった。

〔現状〕昭和52年8月当時の山永氏作成のツクシオオガヤツリ自生状況の見取図では、濠の東北部に2株と東南部に2株が図示されているが、現在は前者の2株は拡大して1群落に生長し、更に濠の東岸沿いに5株と1株（花茎2本、花茎なし1本よりなる稚株）が生じている。東岸沿いは九州大学農学部栽培学教室が移植実験を行った場所に当るが、新しく種子により生じたものが、それとも移植実験したものの再生なのかは判らない。

(3) 3号濠（平和台野球場・陸上競技場前）（東西約480m、東岸南北約26m、西岸南北約100m）

〔経過〕福岡城の各濠の内、3号濠がツクシオオガヤツリの最大の繁殖地であったが、昭和39

4. 発見地以外の自生地

(1) 県内

○粕屋郡古賀町千鳥ヶ池 (永田知恵子 3150、1979・11・25、F)

本会々員の永田氏が見出されたもので、1979・11・4採集の標本を国立科学博物館の館岡亜緒博士に送付されたところ、館岡博士は京都大学所蔵の複基準標本と比較検討の上、ツクシオオガツリで間違いがないとのご教示を下された由である。益村聖氏の線画 (グラビア1頁) はこの千鳥ヶ池産の栽培品に基づき描かれている。筆者はまだ実見はしていないが、池の水辺に自生 (稀には近くの水田の畦) しているとのことである。なお、「福岡県植物誌」 (昭和50年) に記録された「古賀町」もこの千鳥ヶ池のことで、大内準氏の採集に基づく由である。永田氏は大内氏とは別個に独立して千鳥ヶ池の自生地を発見されたものである。1度採集されたことがある茨城県の「神の池」の自生地は護岸工事等のため失われたと報告されているので、古賀町千鳥ヶ池に世界及び日本における北限自生地があることになる。永田氏によれば年々減少しているとのことである。古賀町当局並びに地区住民の方々には、千鳥ヶ池のツクシオオガツリが消失しないように現状保存に努めていただくようお願いしたい。

○福岡市東区香椎、村田池 (永田知恵子 96、1974・10・6)

採集者の永田氏によれば、小株が岸辺に自生していたのみで、採集後間もなく道路改修に伴う護岸工事のため姿を消してしまい、現在は自生していない由である。これが自然分布だったのか福岡城のお濠からの移植に基づくものであったかは何れとも判断されない。

○福岡市南区平和2丁目10、水下し池、海拔約30m (筒井貞雄 21703、1981・9・13、F)

昭和56年9月12日、何の気なしに自宅近くの市所有の洪水調節池「水下し池」をのぞいたところ、4株のツクシオオガツリが自生していることに気付いた。筆者は昭和33年3月以来、数10m離れた所に居住しており、何度か池の中にも入ったこともあったが、ツクシオオガツリの自生には気付かなかった。この池は農業用の溜池であったが、その上流下流とも宅地化したために不用となり、数年前に洪水調節池に改修された。その折りに水位が極端に下げられたのみならず、堤防と周囲の護岸工事のため池の中が干し上げられ、池の岸辺は掘り下げられた。上流側は埋め立てられて広場ができ、長方形の人工的な池に変わってしまった。通常は池の中の下流側半分に水が浅く溜っているが、上流側半分は干し上り道路の排水口から下水が少し流れこんでいる。4株のツクシオオガツリは中間地帯に生えており、雨後の増水時には水中に浸ってしまう。この池に自生するに至った原因は①本来岸辺に自生していたのを種子植物には無関心であった筆者が見逃していたのか、②近年になって水鳥が種子を運んできたのか、③昔から池の泥土の中に混在していた種子が池の改修と水位の下降により水面上に現われて発芽したのか、何れとも確定するだけの客観的な証拠はない。1株は20本内外の稈からなっているので、ここ2、3年の間に発芽して分けつしたものと推定される。今後どのように繁殖するかは興味あるところである。観察の続行が必要である。

○福岡市南区長丘2丁目4、ひょうたん池、海拔約40m (筒井貞雄 21713、1981・

9・15、F)

昭和56年9月15日、西区鳥飼池の大群生調査へ行く途中に立寄ったところ、この池にも5株ほど岸辺に自生していることが判った。この池は地区共有の溜池で、水は十分に溜められている。5株とも岸辺に限って生えており、池の中には見られない。西南隅にある大株からは50本余りの稈が出ている。本会の前身の福岡県植物誌編纂委員会の委員長であった立石敏雄は昭和49年頃、市内の45の池でツクシオオガツリの自生調査を行っているが、当時は後述の野間大池・西の堤の2個所以外では確認できなかったと報告している。本池は現在も沢山見られる野間大池から北西方に750mしか離れていないので、この数年の間に種子が運ばれて自然に繁殖した可能性が高いと考えている。

○福岡市南区柳河内1丁目1、野間大池、海拔約10m（筒井21926、1981・10・11）

野間大池にツクシオオガツリが大群生していることを初めて報告したのは、立石敏雄（1908～1979）（当時は福岡大学薬学部講師）で、昭和49年12月のことである。当時の状況を次のように記録している。「— 池の3分の2以上は湿地化して、— 湿地帯の中を細流が屈曲して3条余り流れているが、この細流近くにツクシオオガツリの大きな株が点生しており、開花期に見ると局部的に集落をなしている。即ち2m～3m間隔で、根元の径70cm～80cmに及ぶ大株が100～150株の群落を形成している所が5個所あり、その他散生しているものを加えるとその総数は1000株をはるかに越えている。特に池の南側のゴルフ練習所に接する池の群落は実に見事で、小さい苗は無数と言ってよい程生育している。—」。これはまことに貴重な証言で、後述する現在の鳥飼池の状況と全く同一であり、大群生は素晴らしいものであったと推測される。この報告の直後、市当局の池の埋立て公園化計画が実施されて、大群生の湿地は全部埋立てられた。現在は池の岸辺及び岸の周辺に移植されたものが数10株残存している。岸の上の株は発育は良くないが、根元が水に浸る所のものは順調に育っている。現在の水位が著しく下って自生地が乾燥化しない限りは減少することはないと思われるが、より良く保存するとも繁殖を促進するためには、岸の上をもっと湿潤化する必要がある。現在は市の洪水調節池内のツクシオオガツリの自生地として標式を立て、南区役所土木農林部管理課・維持課で管理されているが、今後共十分な配慮をお願いしたい。

○福岡市西区友丘6丁目22、鳥飼池、海拔10m（筒井21715・21716、1981・9・15、F）（写真2、3）

昭和56年9月9日、たまたまバスで通りかかって車窓から池全体に拡がる大群生に気付いた。本池は私有の農業用の溜池であったが、周辺部の宅地化に伴い不用となり、上流側は埋立てられて宅地及び公園になった。3分の1程度に縮小された池（1辺が約50mの略5角形）は、数年前に市の洪水調節池になり、堤防が改修されて水位が下げられた。現在は通常、池全体の10分の1程度の広さに水が溜まっているのみで、他は泥沼状態になっている。この地域には下水道が未整備で、雨水・家庭の生活污水のみならず、一部は水洗トイレの汚水も流入している。周辺の居住者の話しでは、以前はツクシオオガツリは岸辺に点在するのみであったが、池の改修に

伴って水位が下がってからは、この2、3年の間に泥沼状の部分に爆発的に繁殖したもので、現在の池の大部分では稻田のように大群生するに至っている。ある通行者の証言では、1年前には池の中には下水の流れが幾条も見られる状態であった由であるが、現在は水面近くを除けば下水の流れが見通せない程に密生するに至っている。立石敏雄は前述の野間大池でツクシオオガツリの自生に気付いた頃（昭和49年以前と推定）、西区西の堤池との間及び周辺に散在する池45以上を全て調査したが、二つの池以外ではツクシオオガツリは確認できなかったと報告している。立石は昭和初頭からの採集家でゲンカイモエギスゲの基準標本も採集している程であるから、その調査の信頼度は高い。したがって、後述の西の堤池のすぐ近くに位置し、立石の通勤コースの途中に位置する鳥飼池は、7、8年前には当然調査しているはずで、当時は自生していなかったと見なすべきであろう。推測の域をでないが、本池には500m位しか離れていない西の堤池から種子が運ばれて来たことにより、洪水調節池への改修で水位が下げられた好条件も重なり、この2、3年間に大群生するに至ったものと考えられる。かつては池周辺住民の要望で池の中が市当局の手で除草されたことがあったと言われるが、ツクシオオガツリは下水の溜りを隠し、空気を浄化する役目も果たしているので、現状のまま保護して下さるように西区役所土木農林部の関係各位と周辺住民の方々をお願いしておきたい。

○福岡市西区片江、西の堤池、海拔10m（永田知恵子568、1975・10・9、F）

昭和43年頃に立石敏雄が発見したのが最初のように、池の南部の二つの湾入部の泥沼化した部分に多数生育していることを昭和49年になって報告している。現在は二つの湾入部だけではなく、池の北岸、東岸、西岸の岸辺にもツクシオオガツリは点在している。現在も水位は高く溜池の状態を保っているため、水位が下がって泥沼状の部分が拡大しない限りは、ツクシオオガツリが拡大することはないと考えられる。

(2) 県外

○茨城県鹿嶋郡神栖町神の池（野口達也、1972・8・23、茨城大学教育学部生物学教室所蔵）

採集者の野口達也が「北陸の植物」Vol. 24, No. 4で「ツクシオオガツリを茨城県で発見」と題して報告したのが、県外における唯一の記録である。しかし、「神の池」は農業用水池への改修に伴う護岸工事や緑地帯造成のため、翌年には自生地が消滅した由で、まことに残念なことである。福岡城のお濠では一時は全滅同様になったにもかかわらず、徐々に復活しつつあるので、「神の池」でも復活する可能性もあると考えている。続けて調査をしていただくように茨城県の植物関係者の方々をお願いしたい。

なお、上記の標本は茨城大学の鈴木昌友教授のご好意で直接借覧することができた。お蔭で福岡でツクシオオガツリに関係が深い長田武正・山永立木・箱山晋の諸先生方にもご覧に入れることができた。海外調査から帰国早々お手数をお掛けした鈴木先生には厚くお礼を申し上げたい。同標本はツクシオオガツリの変異内に含まれるものとする。

5. 生育環境

(1) 生育場所

現在まで筆者が観察し得たツクシオオガツリの生育場所は、福岡城の濠（1、2、4、5、6の各号）、水下し池、ひょうたん池、野間大池、鳥飼池、西の堤池の6個所であるが、永田知恵子発見の千鳥ヶ池、村田池の2個所を含めて8個所は全て池や濠の中であり、小川・溝沿いや湿地の例はない。ただし、鳥飼池では池の外、堤防下の溜水の水辺と岸の上に少し見られ、千鳥ヶ池では池のすぐ横の水田の畦で益村聖氏は採集されているが、共に例外的と思われる。水辺を好むとは言え、例えばスゲ属のタニガワスゲが谷川の早い流水に浸って自生しているのとは対照的であり、ツクシオオガツリは滞水の中を好んでいるのではないかと考える。生育場所の水深については福岡城のお濠も他の池も雨や流入水の多少によって水位は絶えず上下の変化を示しているので正確に計測することは不可能に近いが、福岡城のお濠では通常は深くても30cm程度と推測される。もっとも濠の岸辺に生えている株はもっと浅くなる。

ツクシオオガツリが水中のどの程度の深さまで成育が可能かということは、成株になってからの条件であって、種子の発芽や幼株の発育には別の条件に左右されているはずである。この2～3年の間に爆発的に大群生するに至ったと推測される鳥飼池では、池に下水がゆるやかに流れ込む泥沼状の部分（水面上に出ている所）に大株が稲の株のように無数に並んで群生している。まだ4株しか生えていない「水下し池」でも同じ環境である。もちろん雨後の増水時には根元まで水面が及ぶが、通常は水面上の下水汚土の集積した所に生えている。これは発見されて75年間生育して来た福岡城のお濠の自生振りとは量的にも質的にも明らかに相違している。福岡城のお濠では前述のごとく福岡市当局によって人為的に全滅に近い状態になされたと言っても、ここ数年間は手は付けられていず自然のままになっていたはずである。にもかかわらず旧株が分けつを重ねて拡大して徐々に復活しているように見えるのみで、新しく発芽して幼株から発育しているように見えない。それは福岡城のお濠が公園整備という名目で改変され、大部分の水辺が石垣やコンクリート杭のために消失してしまったことと無関係ではないと考える。

7、8年前の鳥飼池・水下し池の2個所にはツクシオオガツリが自生していなかったと推測されることは前に触れた。その後の両池に共通する環境の変化は、数年前に福岡市の洪水調節池に改修されて、水位が大幅に下げられて池の大部分が水面上に出るとともに平面的な裸地になったことである。そして、かつては水面下であった汚土の集積上にツクシオオガツリが大群生している現状を考えると、汚土が堆積した湿潤地の出現がツクシオオガツリの分布の拡大を許す条件になったと考えても誤りはないであろう。したがって、ツクシオオガツリの種子が発芽して繁殖するためには、濠・池の水中ではなくして水辺のしかも光の当る所である必要があるのではないかと考えていたところ、九州大学農学部栽培学教室の研究報告「ツクシオオガツリの性状と繁殖法について」（昭和47年）ですでに同様の明確な実験結果を得られていたことを知った。その部分の全文を以下に引用転載する。

(8～9頁) 3.ツクシオオガツリの繁殖方法 ①種子による繁殖法

ツクシオオガツリの種子は良く結実する。しかし、現在自生している福岡城のお濠では、ほとんどが地下茎による栄養繁殖で、種子によって繁殖した形跡は見られない。このことが、ツクシオオガツリの分布を狭くしている原因の一つであるとも考えられる。しかし、著者らが詳細に現地を観察したところ、実生のもと思われる数個体を水うち際付近で発見することができた。そこで、九大で実験中の株から種子を取って発芽試験を試みた。まず、種子を水で湿した濾紙を敷いたシャーレ内に並べ、27℃に保たれた定温器中に入れたが、10数日たっても1粒の発芽も認められなかった。そこで、このシャーレを定温器の外に出し室内に放置しておいたところ、約1週間後に数粒発芽しているのを発見した。このことから、ツクシオオガツリは光発芽の性質があるのではないかと推測して、シャーレをガラス室内に搬出したところ90%近い種子が一斉に発芽した。

表-1 異なる光条件下での発芽率

区	最高照度 (Lux)	種子数	発芽種子数	発芽率 (%)
対照区	10,000	758	659	87
遮光 $\frac{1}{2}$ 区	5,000	80	36	45
遮光 $\frac{1}{3}$ 区	3,000	80	14	18
遮光 $\frac{1}{60}$ 区	200	50	1	2
暗黒区	0	200	0	0

表1は異なる光条件下での発芽率を示したものである。この表からもわかるように、ツクシオオガツリの種子は強光下では90%近い発芽率を示すが、弱光下ではほとんど発芽せず、暗黒下では、まったく発芽しなかった。このため、水中や下草の繁茂している普通の場合では光不足のため種子による繁殖はしないのではないかと考えられる。

(以上は引用)

(2) 水質

ツクシオオガツリが自生している濠や池の水質は、一見しただけでも良好とは言えない。何れも水中に手を入れるのがためられるような汚水の中で生育している。大群生している鳥飼池では下水の流入で溜まった汚土の中で生育しており、他の池でも状況には大きな差異はない。立石敏雄は野間大池と西の堤池について、泥土にはかなりの塩分を含んでいるものと思われると書いているし、かつては群生していた福岡城の3号濠では約71 ppmの塩分が検出されたことを山永立木は記録している。他の池とは異なり福岡城の各濠には人家から直接に生活污水が流入している形跡はないが、お濠の周辺部は江戸時代から都市化していて屋敷が密集していた地域であり、明治以降は軍隊の駐屯地でもあったから、発見された明治39年当時には生活污水が流入していたと推測される。また、1601年に黒田長政が福岡城を築城し始めてから明治初期までは、満潮時には海水の流入もあったものと推測される(現在の濠の水面は、明治時代の旧水位から約1m40cm上昇している)。昭和10年当時でも人為的な海水の流入でツクシオオガツリが全滅したことを山崎又雄は記録している。したがって、原産地においてもかなりの塩分を含む水質の中で長い間生育し続けて来たものと考えられる。

人工的な栽培品については、九州大学農学部栽培学教室では長年、浅い水槽の中で栽培し、年々増殖しているとのことである。大井次三郎博士も東京上野の科学博物館内でビニールを敷いた大型の鉢の中に泥土とともに植え、浅水があるようにして栽培し開花結実を得たと報告されている。本会々員の益村聖は昭和55年秋、千鳥ヶ池のすぐ横の水田の畦で1株（これは分けつが1個であったという）採取して、筑後市の自宅で浅い水槽で栽培されたところ、1年後には13本の稈が生じた由である。したがって、人工的な環境で塩分のない水質であっても、根元を水に浸した状態であれば十分に生育できるものと考ええる。

6. 分布の由来

(1) 原産地の福岡城のお濠

ツクシオオガヤツリの世界における分布は正確には把握できないが、北村他（昭和39年）によれば「印度支那・マレーシア地方」、大井（昭和53年）によれば「マレーシア・インド」となっている。山永（昭和52年）は「インドネシアのジャカルタの西南部にあたるパテン州ダノウの湿地帯（海拔100m）及びジャカルタ州」を記録している。何れにしても限られた分布である。これらの亜熱帯・熱帯地方から非常に飛び離れて、暖帯で厳冬期には稀に池の水面が氷結する日もある福岡市に分布するのは、著しい隔離分布と言わざるを得ない。このような隔離分布の由来は何か。北村他は「原産地はむしろアジア熱帯であって、九州へは水鳥か何か運んだものと推定される」と書き、佐藤・麻生（昭和32年）は「——福岡城は舞鶴城とも言い黒田如水・長政の父子が慶長6年から7ヶ年かかって築城したものでこのツクシオオガヤツリグサの生えている濠もその築城の時に築構されたものと思われるのでその後種子が鳥によって運ばれたか、或はすき者がいて移植したか不明である。ただ福岡城跡は太宰府政庁盛んなりし頃の筑紫館（鴻臚館）や警固所の跡でもあるので、その当時の外国使臣の便船に乗って入って来た種子が計らずも入江の牟田で繁茂したか、等等移人説も考えられないこともないが、原野に多いカヤツリグサが福岡城の濠で種々の関係で肥大変化を起したものというのが妥当であろうか。——」（原文のまま）と解説している。したがって、福岡城のお濠への分布の原因は①水鳥が運んだのか（自然分布）、②1000年以前の帰化植物か、③人為的に栽植されたことによるのか、の三つにまとめることができよう。

③の人為的移植については、食用などの有用植物には該当しないツクシオオガヤツリを、明治時代までに遠く東南アジアから入手して栽植することが可能であったかは、はなはだ疑問である。外国との交易が認められていた長崎市には、明治以前に外国から渡来して栽植された植物としてはシーボルトノキ・トックリノキ・デジマノキ等の樹木があるが、ツクシオオガヤツリを同様に考えることはできないと思われる。②筑紫館（688年にその名がでてい）・鴻臚館（865年～1091年）時代に外国使臣の便船に乗って来たものの生き残りであるのか、これも否定的である。筆者は次に述べる理由で、福岡城のお濠のツクシオオガヤツリは明治39年9月1日の発見からそれ程は遠くない以前に他所から種子が運ばれて来て、爆発的に繁殖したものと推定している。それには福岡城の築城について触れなければならない。

1600年、備前岡山から筑前名島に移った黒田如水・長政は、翌年福岡に居城を定め築城にかけ、7年を要して福岡城が完成した。古地図を見ると福岡城の周囲は、現在の姿からは想像もできない程の広い濠に囲まれていた。1812年（文久9年）発行の「福岡城下町・博多近隣古図」によれば、濠は城の四方を取り囲むのみならず、東側の濠に続いて東方に中堀・佐賀堀が伸びており、佐賀堀の東端は旧県庁の南側で那珂川に通じていた。西側は広大な大堀（現在の大濠公園に当るが、非常に縮小されている）があり、現在の黒門川で博多湾と接していた。その古図によると濠の岸は全て石垣でかためられていた。当時は戦国の世ではなかったとは言え、城のお濠としての機能は十分に働いていたと見るべきであろう。福岡城の北濠（1～5号濠）の北岸の石垣は、明治43年福博電車（後の西鉄市内電車）の敷設によって埋め立てられたが、近年の地下鉄工事で再発掘されて一部が地下に保存されている。その石垣に残る水面跡の位置から判断すると、1号濠の現在の水位は当時からは1m40cm程度上昇している。したがって、昭和10年になってからも海水の流入が可能（現在の大濠公園の濠の水位は今も低く、水門がなければ海水が流入する）であったから、明治時代に入るまではお濠には満潮時には海水が流入しており、当時のお濠の塩分濃度は高くツクシオオガヤツリが生育できる環境ではなかったと推定される。お濠の深さは中心で3.5mであったと言われるが、もし生育可能な水質であったとしても、城としての機能を果たしている間に水面が下降したり土砂が溜まったりして、ツクシオオガヤツリが種子から発芽できるような泥沼状の場所が生じたとは思われない。もちろん「すき者が移植した」ということはあり得なかったと考えるのが妥当であろう。

明治時代に入って城のお濠としての機能を果たす必要が失われた時に、福岡部の中心部を東西に伸びるお濠は無用の長物として埋め立てられ始めたはずである。明治20年林円策編刊・金沢元太郎彫刻の「福博鳥瞰図」によると、佐賀堀の東端の那珂川への開口部は閉ざされて川土手になっている。西側の堀と黒門川の状況は判断できないが、この時期には濠全体には海水の流入はなく淡水化しつつあったのではないかと考える。同時にお濠が埋めたてで縮小するとともに徐々に土砂の流入・生活污水の流入も続き、ツクシオオガヤツリが発生しやすい環境が作られつつあったのではないかと考える。したがって、明治20～30年代に東南アジアから直接か、あるいは福岡市近郊のX点（福岡城の南方に位置する現在の樋井川の上流、旧樋井川村の水湿地・池を想定）から水鳥によって運ばれて来たのではないかとするのが筆者の推測である。

(2) 原産地以外の池

ツクシオオガヤツリは原産地の他には、千鳥ヶ池（古賀町）、水下し池・ひょうたん池・野間大池・鳥飼池・西の堤池（以上福岡市）の6個所の池に自生状態で現存している。これらの池についての分布の由来はどうであろうか。昭和43年から同49年の間に行われたと推定される立石の福岡市内の45の池の調査では、西の堤池・野間大池の2個所にしか見出されていない。したがって、水下し池・ひょうたん池・鳥飼池の3個所については、その後近接の池から自然に分布が広がったものと考えて良いのではないかとと思う。残る野間大池・西の堤池の分布の由来はどうであろうか（古賀町の千鳥ヶ池は、筆者は現地を訪ねていないので、検討の対象から除外する）。これはなかなか厄介な難問である。山永が昭和39年9月5日、筑紫郡那珂川町広瀬在

住の富田克己（昭和42年没、元三筑中学校々長）から聞知した話として、年代は特定できないがツクシオオガツリの生株が珍しい植物として福岡市内の小中学校の校長に配布された事実があったことを記録している。今回、富田克己の令息の富田雅輝氏にお尋ねしたところ、ツクシオオガツリの配布は三筑中学校々長在任時（昭和29年4月～同35年4月）のことで、当時は火鉢の中と水田で栽培されたとのことである。水田に移植したものは越冬できずに枯死したとのことである。他方、同氏の夫人の実家（佐賀県三養基郡基山町白坂、天本浩氏方）の小さい池に移植されたものは良く繁殖し、隣りの水田の中まで広がり、稲の発育に害になったので取り除いたとのことである。現在は栽培はしていないとのことであるが、同地区に将来ツクシオオガツリが発生する可能性もあるので、人為的な移植の事実があったことを記録にとどめておく。また同じく山永によれば年代は不明であるが、青年団活動を通じて配布され、福岡市東区松崎でも栽培された事実もあるとのことである。このような事実に基づき、野間大池・西の堤池については人為的な移植に由来するのではないかと山永は語っている。筆者もその可能性があると考えますが、肯定するだけの具体的な証拠は見出してはいない。

他方、山崎又雄（昭和11年）は天然記念物調査報告書の中で「—九州帝国大学農学部の中島住彦氏は福岡城濠の外樋井川辺にも見出されし由である」と書いている点が注目される。西の堤池・鳥飼池は樋井川上流の地域に含まれるし、野間大池は川筋が異なるにしても近接地に位置している。福岡城のお濠にツクシオオガツリが出現する以前からこの地域には自生していた可能性もあるのではないかと考えている。すなわち、前述の如く明治20～30年代になって福岡城のお濠にツクシオオガツリの種子を供給したバックランドX点の存在を、この樋井川流域に想定したいのである。この点について現在は鹿児島市に在住される中島住彦博士にお尋ねしたところ、「お尋ねの樋井川辺に私がツクシガツリを発見した記事のことですが、40年も前のことでよく記憶して居りませんが、発見した場所は川辺ではなく小さな池であったようです。多分当時採集したかも知れませんが九大の腊葉室を調べて見て下さい」とのお返事をいただいた。農学部造林学教室の標本を調べたところ、中島博士採集の標本としては「筑前福岡市」という産地で1枚（昭和7年9月11日採集、No.1731）があるのみで、旧樋井川村のものは検出できなかった。しかし、昭和初頭の樋井川の流域の池にツクシオオガツリが既に自生していたことは確実である。残念ながらこの地域は新興住宅地とし開発つくされておき、昔日の面影は全く失われている。ツクシオオガツリの分布の由来の追及も困難さが増すばかりである。

(3) 分布の仲介者

(1)の項でツクシオオガツリの種子は水鳥が運んだものではないかと書いたが、推定の域をでないことはもちろんである。しかし、東南アジア→福岡、福岡市内の池→池の分布の伝播を考えると、その仲介者は空間を移動できる水鳥以外には想定できないことも事実である。しかも東南アジアから種子が運ばれて福岡市で発芽・生育するためには春から夏の間であることが必要である。また、福岡市内で種子が運ばれるためには、種子が熟する10月以降であることが必要である。筆者は野鳥については無知に等しいので、知人の福岡野鳥の会の村松成子氏に紹介していただいた同会幹事の木下英彦氏に以上の事情をお話してご教示をいただいた。以下は木下氏のお話

次にツクシオオガヤツリの自然繁殖を促進するために注意すべき点を述べる。

- ① ツクシオオガヤツリの株周辺のアシ・マコモ・ハスその他の植物の除去は11月では遅くて効果が少ないと考えられる。葉身が新しく伸び出して展開し終るまでにツクシオオガヤツリに支障を与えている植物は除去しておくべきである。その時期は慎重を期して九州大学農学部栽培学教室の専門家に指示を仰ぐ必要がある。
- ② ツクシオオガヤツリの種子散布による自然繁殖を妨害しないために各濠の水際の水際線の保全をはかることが必要である。筆者の昭和56年10月における数回の観察によれば一部には稚株も認められたので、種子による繁殖も途絶えてはいない。しかし、残念なことに毎年11月の除草作業のために、稚株が生えた水際は作業者によって踏み荒されるだけでなく、アシ・マコモと共に切り取られているのが現状である。各濠の岸で石垣や杭が設けられていない水際は釣り人その他が立入らないように柵を設けるべきである。またこの地域の除草は、舞鶴公園管理事務所単独に委せず、市の教育委員会文化財管理係植物担当者も関与して慎重に行う必要がある。
- ③ ツクシオオガヤツリの株の分けつを福岡市緑化植物園の温室及び戸外の水槽に移植して原品地のツクシオオガヤツリの永久保存と繁殖をはかるとともに栽培研究を継続して行う。
- ④ 各濠への水の流入経路を確認するとともに、定期的に水質の検査を行い、生育環境の悪化を事前に防ぐ必要がある。
- ⑤ 原品地のツクシオオガヤツリが不幸にして衰微して行った場合でも、他の池のツクシオオガヤツリを安易に移植して補充することは避けるべきである。各地のツクシオオガヤツリの細胞学的研究は空白のままである。形態的にはツクシオオガヤツリと同定されても、遺伝的には全く同じものであるとは限らず、例えば染色体数が異なったりして遺伝的には複数の系統の存在が想定されるからである。

(2)原品地以外の各池

古賀町の千鳥ヶ池は日本住宅公団の所有になり、古賀町役場企画課の話しでは既に開発事業が始まり、道路新設のためツクシオオガヤツリの自生地も影響を受けることになった。該当の株は大内準氏の要請に応じて安全な所に移植されたとのことである。千鳥ヶ池は現存するツクシオオガヤツリの貴重な北限自生地である。残っているツクシオオガヤツリは移植ではなく本来の自生状態で保存措置を講じていただくよう日本住宅公団並びに古賀町役場の関係各位にお願いしておきたい。ツクシオオガヤツリが古賀町に自生していることは、古賀町民が世界に大きく誇り得る事実である。ツクシオオガヤツリの自生を過去のことにしてはならない。学術的な面からも自然保護の面からも教育的な面からも、ツクシオオガヤツリの自生地を本来の自生状態で保護し、自然に繁殖できる環境を維持するための対策を講じていただくことを切望する。

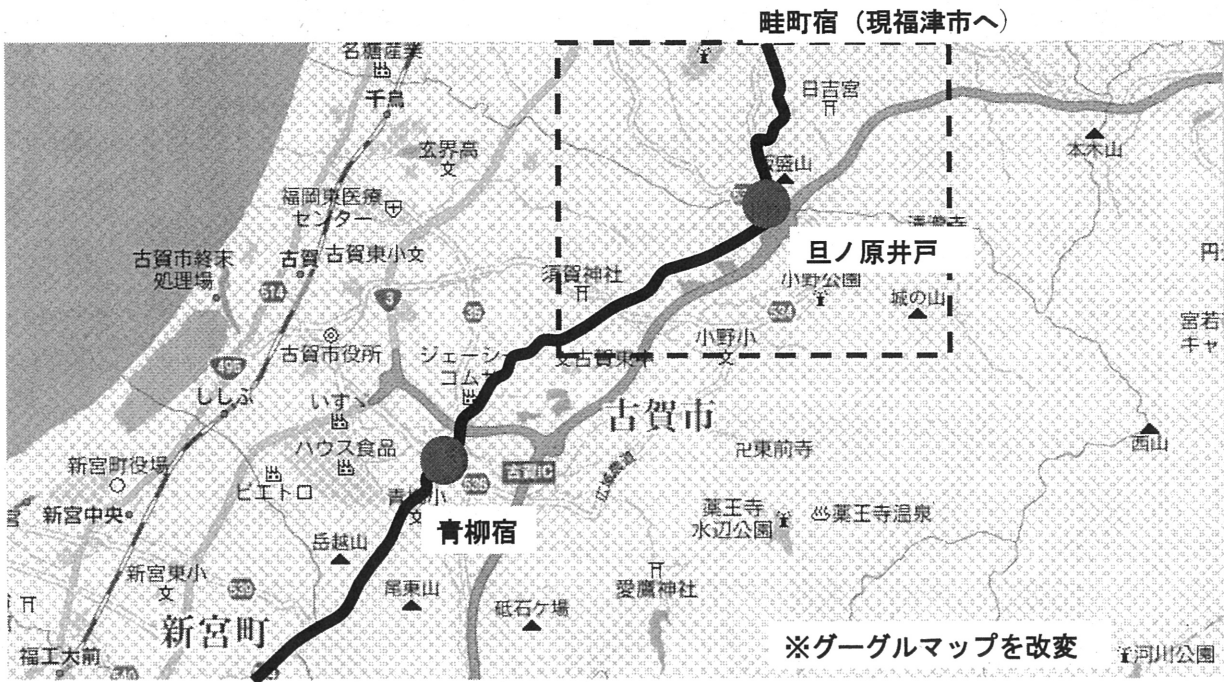
福岡市の水下し池・野間大池・鳥飼池・西の堤池の4個所は福岡市の洪水調節池として各区の土木農林部の管理下にある。野間大池については管理上配慮されており、水下し池についても昭和56年10月の除草の際にツクシオオガヤツリだけは刈り残す処置が取られて、貴重な植物として十分に認識されている。鳥飼池の大群生についても西区役所に通報済みである。本年度は池の中の除草は行わないとのことであった。市所有の洪水調節池に自生するツクシオオガヤツリは

現在の環境で十分に生育し得るものと思われる。わずかに4株しか自生しない「水下し池」も来年はもっと繁殖することを期待している。ツクシオオガツリの自生は洪水調節の機能に悪影響を及ぼすとは考えられないので、継続して配慮していただくようお願いしておきたい。

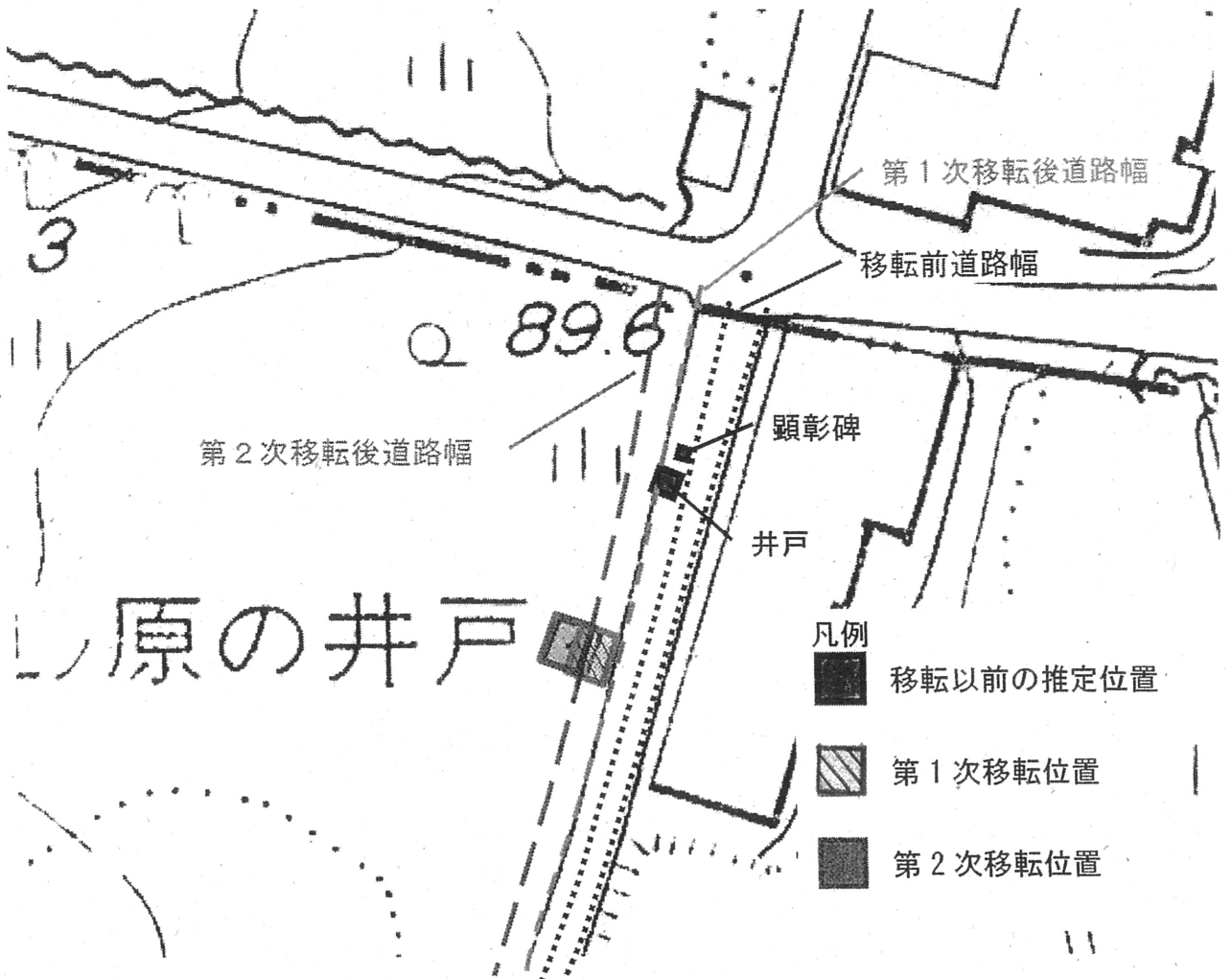
明治39年に福岡城のお濠で発見されてから既に4分の3世紀が過ぎた。人為的な原因に基づくツクシオオガツリの衰退については既に述べた。21世紀に誕生する人々にツクシオオガツリを見せることができない状況を招来するならば、それは20世紀に生きるわれわれの責任である。植物に興味を持つ人々だけではなく、広く多くの市民にツクシオオガツリについての関心を持っていただくことを切望する。筆者が長々と拙稿をつづったのも「ツクシオオガツリを守りたい」という気持からであった。現在までツクシオオガツリを守るために努力されて来た方々には心から敬意を表したい。

8 参考文献

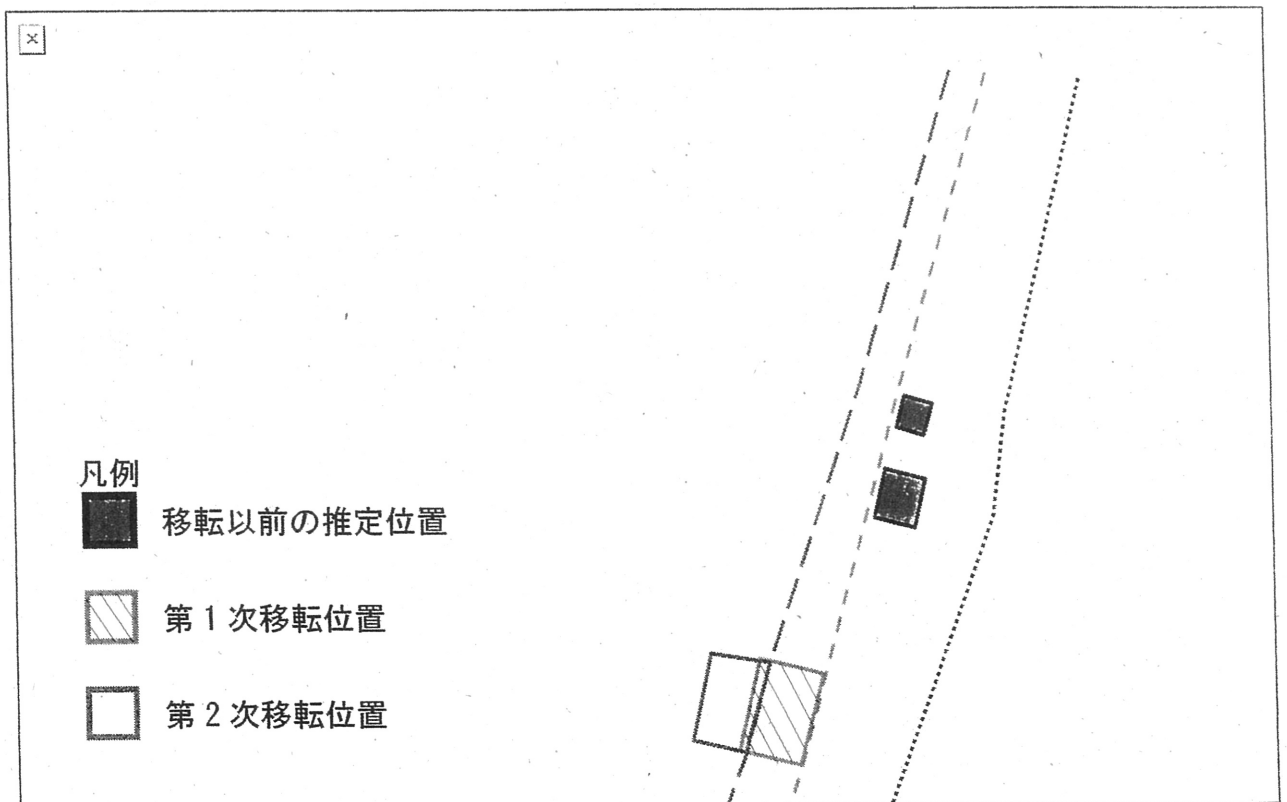
1. 田代晃二 田代善太郎日記明治篇(1968)
2. 山崎又雄 つくしがやつり 福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書第11輯(1936)
3. 大井次三郎 ビャッコイとツクシオオガツリ 植物採集ニュース第47号(1970)
4. 佐藤敬二・麻生繁樹 ツクシオオガツリグサ 福岡県文化財調査報告書第23号(1961)
5. 西日本新聞社発行西日本新聞昭和39年9月18日朝刊
6. 立石敏雄 ツクシオオガツリの分布について 福岡の植物創刊号(1974)
7. 九州大学農学部栽培学教室 ツクシオオガツリの性状と繁殖法について(1972)
8. 北村四郎他 原色日本植物図鑑草本編Ⅱ(1976)
9. 福岡県高等学校生物研究部会編 福岡県植物誌(1975)
10. 野口達也 ツクシオオガツリを茨城県で発見 北陸の植物24巻4号(1977)
11. 山永立木 福岡市に於ける特殊生物の生態的研究(第5回)(1978)



旦ノ原井戸位置図 (1/25,000)



旦ノ原井戸移転変遷略図1 (約1/1,000)



旦ノ原井戸移転変遷略図2

文藝部 四 (長) 矢野政雄 三原啓一郎 小河口次郎

中野素雄 安部 哲 田 木 文 打

郡内各町村訪問伝競走 一月廿九日に決行

図書館コンクール に於て名譽ある努力賞と決る

町消防団の充実 町消防ポンプ 購入 31

米医王精舎進 招徠脩築使君懸 閣魔堂解公孫樹 葉葉紛飛旧碑 西之丘 平家殘覺解孤軍 再發無成留古墳 八百余年唯一夢 望望西岳平天雲 花鶴川 古賀江兵草帶煙 松青沙白遠連天 明波写出橋山影 流注玄洋花鶴川 同書にある雷山先生の漢文で書かれた自序の一部を平易に訳して先生を今少し紹介いたします。

「私は癸卯二年十二月十九日に、筑前粕屋の筈内で生れ、今年八十八才の米寿になります。梅岫子から雷山詩集を出版して後世に伝えるようにとの勧めがありました。更に梅岫子が云われるには、翁の詩に氣象が渾厚で容大雅、慨出憂國の至誠であることが生しく散逸することは無いこと、世の中に私と同じように考えている者が多いので先生は何で遠慮されませんかというので私は笑つて云いました。昭和四十年には私が百才に達するので何でそんなに急ぐことがあるものか、という梅岫子も笑つて云うに翁は百才まで長命せられましようが、私の方がそれまで延びません。今が最も好い時機である」と。

「私は年弱越二十才で郷里を離れて京に遊學して醫術を修め、苦辛酸たんずること数年で、外科病院と商業学校を創設しました。推薦せられて大阪医師会会長を十二年、又大阪府政に参与すること二十八年間、府會議

長に推戴されること三度に及んだが、たまさか府会の癡獄事件に連坐して、幽囚の身となること数年免囚せられた時は世情が一変して、私の志は之に副わないので再び政界に入ることを止め、医術の精進に専念し、布施市に別荘を

先に入下隨一の分校々舎として、竣工した古賀分校に、石を運ぶ木を植えて見事な茶庭が完成した。庭師の話を聞けば、椽先から見ると、先づ且の原の史蹟についてのボツンと一つとびかえている小田藩時代に粕屋郡の北端宗像郡との界の街道筋に二部四ヶ村にまたがり井戸一つと云う十七戸の一丁の小聚があつた。ここは江戸参勤交代の時など青柳の宿場(現在の青柳町から畷町の宿場)迄の通路の要所で継かき道の休む所で酒や菓子わらじなどを売るといふもあつてその頃は随分賑つていたと云うが、今はその面影ばかりを止め、戸数も十戸程に減つて全部農家がかりになつていて且の原である。

此の小部落が明治二十二年町村合併以前には宗像郡上西郷村、粕屋郡の小野村と席内村四ヶ村に行政の区別が別れていたのは珍らしい事だつた。

志賀海神社を出発点として、西戸崎、和日町役場、古賀町役場(小野を経て)青柳支所、立花支所、猪野大神宮前(久原を経て)大川村役場、仲原志賀神社前、志免町役場、(宇美八幡宮を経て)参宮線踏切、須東町役場、(だいま池を経て)篠栗町役場を決勝点とする全走路六十九軒に及ぶ郡内各町村十名による訪問伝競走が一月二十九日午前十時出発で發行せられる。本町も百千種製紙の選手を根幹とする次の通りのメンバー

一 区 児島 武美君
二 区 柴田 一君
三 区 高田 正弘君
四 区 石原 義明君
五 区 万田 正行君
六 区 花田好之助君
七 区 平川 慶一君 岡部
八 区 柴田 毅君 ニビシ

この地帯には古い塚が列をなして、野野野と且の原内地区に互つて數十ヶ所もあつたが二三を残し其の他は全部発掘し去られていた。小森と云う所に残存しているのは内部が二室に別れ小石で積んだ突に珍らしいものである。

その他大きな石蓋のある塚も二三あるが、これは他日考古学者の参考資料ともなる事と思ふ。又此の附近から首飾りや石製土瓶等が開墾の際に出て来る事も珍しくない(或は宗像族の史蹟として重要なものではあるまいか) 飯盛山麓より東南五〇〇米の所に調査したところであつたが、又久三年間郷の伊藤忠平なるものが深く之を窺いて、大庄屋石松林平と謀り鑿井の計画を立て、井水まで八十尺、水溜十二尺の大工事を同年十一月完成した。今に到るまで同所に記念碑を建て、両氏の美談をたたえている。

ばかばかしい大袈裟な親も子もその後を苦しむ従来の結婚式が、ようやく年来の因襲から脱けようとする動きが活発になつて来た。粕屋郡の改訂規約を根幹として更にしてそれ以上の節約を奉行せられて来たが、庄区では今までの慣習を二てきして次のような申合せをしていよいよ実行せられることになつた。

申合せ 一、粕屋郡の結婚改訂規約を厳守します。 二、右の外次の通り実行します。 イ、本客は十五人以上とする。 接待役を含む。 口、酒肴及び茶番は廃止する。

古賀町消防力の強化を図るため町消防ポンプ(台車いすずボブ一〇五馬力中形)を十二月二七日入車した。当分の間格納庫都合に依り、第一分団第五部(實)に委託する見込である。

古賀町小竹出身、現在八幡市常岡熊五郎氏の美幸 四十人前の備品寄贈 小竹公民分館に

福岡県教育会、西日本新聞社 学校図書館協議会の主催による 中学校図書館コンクールに参画した東小学校図書館は、審査員賞の改正縮小な審査の結果、校長を初め全職員児童の努力が認められて努力賞を受けることの内 に接している。近日中にその學 校の功績は特筆すべきもので

古賀町小竹出身、現在八幡市常岡熊五郎氏の美幸 四十人前の備品寄贈 小竹公民分館に

古賀町小竹出身、現在八幡市常岡熊五郎氏の美幸 四十人前の備品寄贈 小竹公民分館に

古賀町小竹出身、現在八幡市常岡熊五郎氏の美幸 四十人前の備品寄贈 小竹公民分館に

古賀町小竹出身、現在八幡市常岡熊五郎氏の美幸 四十人前の備品寄贈 小竹公民分館に

古賀町小竹出身、現在八幡市常岡熊五郎氏の美幸 四十人前の備品寄贈 小竹公民分館に

古賀町小竹出身、現在八幡市常岡熊五郎氏の美幸 四十人前の備品寄贈 小竹公民分館に

古賀町小竹出身、現在八幡市常岡熊五郎氏の美幸 四十人前の備品寄贈 小竹公民分館に

古賀町小竹出身、現在八幡市常岡熊五郎氏の美幸 四十人前の備品寄贈 小竹公民分館に

古賀町小竹出身、現在八幡市常岡熊五郎氏の美幸 四十人前の備品寄贈 小竹公民分館に

古賀町小竹出身、現在八幡市常岡熊五郎氏の美幸 四十人前の備品寄贈 小竹公民分館に

古賀町小竹出身、現在八幡市常岡熊五郎氏の美幸 四十人前の備品寄贈 小竹公民分館に

古賀町小竹出身、現在八幡市常岡熊五郎氏の美幸 四十人前の備品寄贈 小竹公民分館に

古賀町小竹出身、現在八幡市常岡熊五郎氏の美幸 四十人前の備品寄贈 小竹公民分館に

古賀町小竹出身、現在八幡市常岡熊五郎氏の美幸 四十人前の備品寄贈 小竹公民分館に

古賀町小竹出身、現在八幡市常岡熊五郎氏の美幸 四十人前の備品寄贈 小竹公民分館に

古賀町小竹出身、現在八幡市常岡熊五郎氏の美幸 四十人前の備品寄贈 小竹公民分館に

古賀町小竹出身、現在八幡市常岡熊五郎氏の美幸 四十人前の備品寄贈 小竹公民分館に

古賀町小竹出身、現在八幡市常岡熊五郎氏の美幸 四十人前の備品寄贈 小竹公民分館に

古賀町小竹出身、現在八幡市常岡熊五郎氏の美幸 四十人前の備品寄贈 小竹公民分館に

古賀町小竹出身、現在八幡市常岡熊五郎氏の美幸 四十人前の備品寄贈 小竹公民分館に

古賀町小竹出身、現在八幡市常岡熊五郎氏の美幸 四十人前の備品寄贈 小竹公民分館に

古賀町小竹出身、現在八幡市常岡熊五郎氏の美幸 四十人前の備品寄贈 小竹公民分館に

古賀町小竹出身、現在八幡市常岡熊五郎氏の美幸 四十人前の備品寄贈 小竹公民分館に

古賀町小竹出身、現在八幡市常岡熊五郎氏の美幸 四十人前の備品寄贈 小竹公民分館に

古賀町小竹出身、現在八幡市常岡熊五郎氏の美幸 四十人前の備品寄贈 小竹公民分館に

古賀町小竹出身、現在八幡市常岡熊五郎氏の美幸 四十人前の備品寄贈 小竹公民分館に

古賀町小竹出身、現在八幡市常岡熊五郎氏の美幸 四十人前の備品寄贈 小竹公民分館に

古賀町小竹出身、現在八幡市常岡熊五郎氏の美幸 四十人前の備品寄贈 小竹公民分館に

古賀町小竹出身、現在八幡市常岡熊五郎氏の美幸 四十人前の備品寄贈 小竹公民分館に

古賀町小竹出身、現在八幡市常岡熊五郎氏の美幸 四十人前の備品寄贈 小竹公民分館に

古賀町小竹出身、現在八幡市常岡熊五郎氏の美幸 四十人前の備品寄贈 小竹公民分館に

古賀町小竹出身、現在八幡市常岡熊五郎氏の美幸 四十人前の備品寄贈 小竹公民分館に

古賀町小竹出身、現在八幡市常岡熊五郎氏の美幸 四十人前の備品寄贈 小竹公民分館に

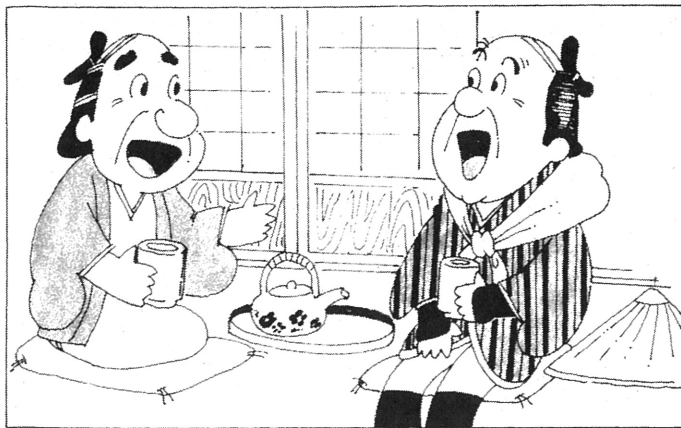
古賀町小竹出身、現在八幡市常岡熊五郎氏の美幸 四十人前の備品寄贈 小竹公民分館に

古賀町小竹出身、現在八幡市常岡熊五郎氏の美幸 四十人前の備品寄贈 小竹公民分館に

ふるさと探訪Ⅱ

わたしたちのふるさとには、まだまだたくさんの伝説や史跡がうずもれたまま残っています。

その一つ一つを探りながら、みなさんに紹介していくシリーズです。



青柳の町川原から筵内の鷺白橋（さぎしろばし）を通り、宗像郡の福岡町へとぬける県道五〇三号線（町川原・赤間線）は、江戸時代、官道の唐津街道（芦屋・赤間・青柳・箱崎・博多・今宿・唐津）として、参勤交代や旅人などが盛んに往来した街道です。

旦の原の古井戸（その一） 古い大きな井戸

寄稿——吉川 鷹助
（町文化財調査委員）



薦野と福岡町の内殿とに分かれている。この集落は、粕屋郡の筵内村（今の筵内）と小野村、それに宗像郡の上西郷村と下西郷村という四つの村がちやうど十文字に交わる

ところでもありました。その中の筵内村に属する街道沿いには、今でも大きな古い井戸が残っています。この井戸は昔から「二郡四カ村井戸一ツ」と呼ばれ、その名称の由来には次のような話が語り継がれています。

江戸時代も終わろうとしているころのことです。

宗像郡の徳重（今の宗像町）の大庄屋、石松林平は、藩のご用やそのほかの用で、よく、この唐津街道を通っては福岡へ出向いていました。そして、その行き来には、必ず旦の原にある伊藤忠平という一軒の家に立ち寄り、休息をとっていました。

ある日、林平が福岡へ出向く途中、いつものように忠平宅に立ち寄って一服していると、忠平がこんな相談を持ちかけたのです。

「実は林平さん、この旦の原には井戸が一つもなく、みんな水のない生活にホトホト困っています。かといって、こんな高いところに井戸を掘るにはとてつもない大金がかかるという話だ。そこで、あなたに一つ相談があるんだが……」。

以下は次号へ。

ふるさと探訪Ⅱ

わたしたちのふるさとには、まだまだたくさんの伝説や史跡がうずもれたまま残っています。

その一つ一つを探りながら、みなさんに紹介していくページです。



相談を受けた林平は急いで福岡城へ……

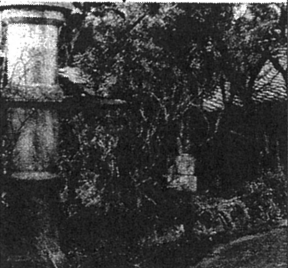
宗像郡の大庄屋、石松林平が官道の唐津街道（今の県道五〇三号線）を通って福岡へ出向く途中、いつものように旦の原にある一軒の屋敷に立ち寄り、一服していると、その屋敷のあるじ、伊藤忠平からこんな相談を持ちかけられたのでした（前号参照）。

その相談というのは、井戸が一つもない旦の原に、なんとか井戸を掘ってもらえるよう、黒田の殿様に林平からお願いしてほしいというものでした。

真剣に訴える忠平の願いに、お茶をすすりながらしばらく考え込んでいた林平は、ひざをポーンとたたくと、

旦の原の古井戸（その二） その返答ぶりに 林平はただギョト

寄稿——吉川 鷹助
（町文化財調査委員）



「わかりました忠平さん、この街道は参勤交代などで殿様もよくお通りになる街道だ。たしかにこんな峠の上に井戸を掘るなど無理難題かもしれないが、なかに、われらが黒田

の殿様のことだ、きっと引き受けてくださるにちがいない」というが早いか、身支度もそこそこに福岡へと先を急いだのです。

粕屋郡と宗像郡とのちやうど郡境にある旦の原では、四つの村が一つの集落をつくって仲むつまじく暮らしていました。しかし、そんな村人たちにも

たつた一つ、この近くに井戸がないというのが悩みの種でした。つ 33、忠平が林平に持ちかけた相談というのは、そんな村人たちの声を代表した切実な願いだったのです。

さて、福岡へと着いた林平は、ほかの用はさておき、まずはさっそく福岡城の殿様のところへ出向いて、この相談を訴えました。

すると、忠平らの願いが天に通じたのか、無理難題にもかかわらず、黒田の殿様はこの訴えを心よく聞き受けたのです。しかも、その井戸開発にかかる費用はすべて藩で持とうというオマケまでついて……。

思いもかけないその返答ぶりに、林平はただ「ギョトン」としていました。ときに文久二年（一八六二年）、江戸時代も終わりを告げようとしているころです。

以下は次号へ。

ふるさと探訪Ⅱ

わたしたちのふるさとは、まだまだたくさんの伝説や史跡がうずもれたまま残っています。

その一つ一つを探りながら、みなさんに紹介していくページです。

目の原の古井戸 (その二)

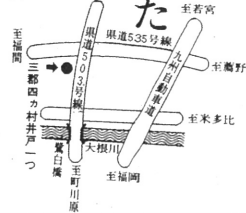
最終回

旅人たちからも喜ばれた

一郡四か村井戸一つ

文 吉川 鷹助

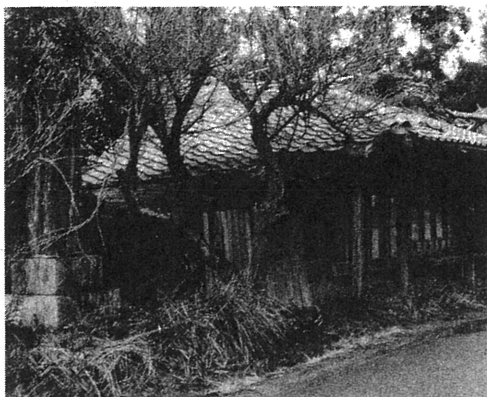
町文化財調査委員



文久二年(一八六二年)。井戸開発にかかる費用はすべて藩が受け持つというオマケまでついて、とうとう目の原の井戸開発が決定されました(前月号参照)。

そして、翌年の秋には伊東忠平の屋敷内に、周り(直径八センチメートル)を石がきで囲んだりつばな井戸が完成したのでした。

中ほどから袋状に広がる井戸は深さ二十一メートル(水深は約三・三メートル)もある大きなもので、完成までに要した人夫は延べ千人を超えたであろうといわれます。つまり、当時としてはそれほどの大事業だったわけですね。



井戸の横に石碑とともに残る「忠平屋敷」。

井戸は、県道五〇三号線(旧唐津街道、町川原・赤間線)と県道五三五号線(薦野・福岡線)とがちょうど交差する地点から、わずか二十メートルほど筵内寄りの道路沿いにあり、完成から百年以上たった今でもりっぱに清水が湧き出ています。そして、粕屋郡と宗像郡の五世帯にそれぞれ電動ポンプで水を供給しています。また、伊東忠平の屋敷もそのまま残っていますが、一昨年の台風で大被害を受けて、今では住む人もいません。

さて、この井戸の完成を心から喜んだのはいうまでもなく、これまで井戸のない生活に困っていた粕屋郡の席内(筵内)村と小野村、それに宗像郡の上西郷村と下西郷村の四つの村人たちでした。しかし、それだけではありません。なにしる人の往来の激しい唐津街道沿いのこと、しかも峠の上にある唯一の井戸ということ、ここを通る旅人たちからいふんありがたがられました。と同時に、旅人たちの便りとなって、またたく間に遠くまで知れ渡ったのです。

こうしてそれからともなくこの井戸を「一郡四か村井戸一つ」と呼ぶようになり、井戸開発に力を注いだ伊東忠平の功績をたたえ、明治三十四年には石碑も建立されました。

おわび：二回、三回は伊藤忠平となっていました。これは伊東忠平の誤りでした。

ふるさと探訪Ⅱ

わたしたちのふるさとは、まだまだたくさんの伝説や史跡がうずもれたまま残っています。

その一つ一つを探りながら、みなさんに紹介していくページです。

熊野神社の大絵馬 (その一)

今にも飛び出してきそうなきごとな黒馬

文 吉村 良七

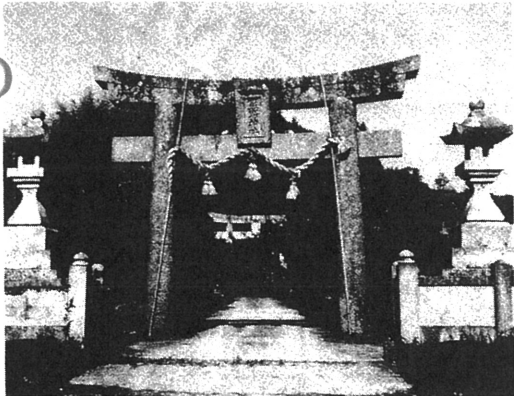
町文化財調査委員



大根川に架かる溪雲寺橋(筵内)から北側を望むと、目の前には新緑に彩られた雄大な鷲白山が広がり視界をさえぎります。その鷲白山の北の峰には延々と続く二百二十三段もの石段が設けられています。その階段を上段まで登り詰めていくと、そこには熊野神社の殿舎が静かなたたずまいを見せています。

この熊野神社は文安五年(西暦一四四八年)に將軍、足利義政が現在地に建立し、天文年中(いつかは不明)にその子孫の足利義晴の手によって再建されました。

殿舎の周りには椎の木やたぶの木、



静かなたたずまいを見せる熊野神社

馬が掲げられています。この中には文化財としての価値もあるといわれる貴重なものも少なくありません。数年前、この絵馬について町文化財調査委員会が調査を行いました。そのときに予期しない絵馬なども見つかりました。

その一つは、筆者の四代前に当たる金左衛門親宜こと、吉村源六翁が寄進した二点の献額(母子の彫刻・狸々飲酒の絵馬)ですが、その34に掲げられているもう一つの大絵馬に、一瞬、ハッとさせられます。

それは、今にも飛び出してきそうなきごとな黒馬が描かれた大絵馬で、その迫力を見る人をくきづけにするほどのものです。

さて、この大絵馬については昔から次のような民話が語り継がれています。今月から、この民話について書いてみることにしましょう。

筵内は、今から千二百年以上も前の大宝律令(西暦七〇一年)のときに「席打(当時は筵内をこう書いた)」という馬が設けられ、交通のうえからも、また政治のうえからも重要な村落として、それはそれは静かで平和な里でした。

以下は次号へ。

*馬車(馬)の都、京都を中心として、諸国に駅馬、馬車制度が設けられていたが、このとき、宰府(京都)にあった馬車舎の一つが当時の席打に設けられました。駅馬には十五頭もの馬が常駐していました。

4 (1) ウ. 青柳村兵時資料

No.	兵事 資料名	数量	提借者・資料所在	備考(年代・内容)	函番号	資料総数
1594	兵事事績綴	書冊1	青柳村役場	[昭和5年から]	61	1
1595	海軍志願兵志願者身上調査綴(秘 村長兵事係ノ外閲覧ヲ禁ス)	書冊1	青柳村役場		61	2
1596	関門及北九州防空演習二関スル書類綴	書冊1	青柳村役場	昭和6年度	61	3
1597	陸軍勤務演習召集者名簿	書冊1	青柳村役場	昭和6年以降	61	4
1598	地方馬・軍用保護馬二関スル書類綴	書冊1	青柳村役場	昭和18年以降	61	5
1599	海軍関係書類綴	書冊1	青柳村役場	昭和19年度	61	6
1600	普通兵事事績綴	書冊1	青柳村役場	昭和19年	61	7
1601	軍需労務関係書類綴	書冊1	青柳村役場	昭和12年	61	8
1602	昭和廿年度点呼事績綴	書冊1	福岡県糟屋郡青柳村	昭和20年度	61	9
1603	軍隊関係書類綴	書冊1	[青柳村役場]		61	10
1604	賞賜物件二関スル綴	書冊1	青柳村役場	昭和17年以降	62	11
1605	普通兵事事績綴	書冊1	青柳村役場	昭和20年	62	12
1606	大東亜戦争罹災対策資金経理簿(船越喜代次氏寄付金)	書冊1	青柳村役場	[昭和20年7月から]	62	13
1607	昭和二十年壮丁連名簿	書冊1	糟屋郡青柳村	昭和20年	62	14
1608	金保有状況調査事績綴	書冊1	青柳村役場	昭和14年	62	15
1609	金属保有状況調	書冊1		昭和16年9月10日	62	16
1610	占領地より持帰へられた物件関係綴	綴 1	青柳村役場		62	17
1611	動員二関スル書類綴	書綴1	青柳村役場	昭和12年7月以降	62	18
1612	動員下令後ニ於ケル書類綴	書綴1	青柳村役場	昭和12年7月～昭和14年12月	62	19
1613	青柳村充員召集令状綴	書綴1	箱崎警察署	昭和12年7月～昭和15年12月	62	20
1614	動員二関スル書類綴	書綴1	青柳村役場	昭和15年1月～昭和16年12月	62	21
1615	動員二関スル事績綴(動員下令後)〈秘〉	書綴1	青柳村役場	昭和16年3月～昭和19年3月	62	22
1616	入営応召後事績綴	書綴1	青柳村役場	昭和17年	62	23
1617	陸軍簡閲点呼二関スル書類	書綴1	青柳村役場	昭和17年	62	24
1618	発来綴	書綴1	青柳村分会	昭和18年	62	25
1619	陸軍簡閲点呼二関スル書類	書綴1	青柳村役場	昭和18年	62	26
1620	召集解除者通知綴	書冊1	青柳村役場	昭和18年度以降	62	27
1621	応召入営後ニ於ケル事績綴	書綴1	青柳村役場	昭和18年度以降	63	28
1622	動員二関スル事績綴	書冊1	青柳村役場	昭和19年	63	29
1623	徴兵二関スル事績綴	書冊1	青柳村役場	昭和19年	63	30
1624	徴兵二関スル事績綴	書冊1	青柳村役場	昭和20年	63	31
1625	海軍応召者身上調査書(同内容の書類他2枚同封)	綴 1	野又周蔵 青柳村長 横大路啓次郎	昭和20年5月7日	63	32
1626	戦犯容疑者調査名簿	書冊1	青柳村役場	昭和21年	63	33
1627	戦死者二関スル事績綴	書冊1	青柳村役場	昭和17年以降	63	34
1628	戦時死亡報告綴	書冊1	青柳村役場		63	35
1629	戦時死亡者二関スル事績綴	書冊1	青柳村役場	昭和21年4月1日以降	63	36
1630	[戦死者人名簿]	紙 2	青柳村役場		63	37

1631	靖国神社参拜事績綴	書冊1	青柳村遺族会	昭和28年1月	63	38
1632	旧陸海軍軍人軍属戦歿者名簿	書冊1	青柳村役場	昭和26年10月	63	39
1633	青柳村内戦歿者遺族受付簿	書冊1	青柳村役場	昭和27年5月25日	63	40
1634	維新以後各戦役従軍者及有位帯勲者名簿	書冊1	青柳村役場		63	41
1635	大日本飛行協会会員名簿	書冊1	青柳村委員部	昭和17年9月	63	42
1636	在郷軍人名簿	書冊1	青柳村	昭和元年以降	63	43
1637	戦歿軍人調	綴 1		昭和19年まで	63	44
1638	補充兵在郷軍人名簿	書冊1	糟屋郡青柳村役場	大正6年～昭和15年	63	45
1639	国防献金皇軍慰問金寄託整理簿	書冊1	青柳村役場	昭和12年8月	63	46
1640	青柳村軍事後援会寄附金受入簿	書冊1		昭和14年3月	63	47
1641	経理簿	書冊1	海軍協会青柳村分会	昭和19年2月29日～21年2月6日	64	48
1642	内務大臣祝辞	綴 1	内務大臣法学博士一木喜徳郎	大正4年12月3日	64	49
1643	会長訓示	綴 1	帝国在郷軍人会会長寺内正毅	大正7年10月12日・大正4年12月3日他	64	50
1644	陸軍大臣海軍大臣訓示	綴 1	陸軍大臣岡市之助・海軍大臣加藤友三郎・陸軍大臣山梨半蔵	大正4年12月3日・大正10年9月4日	64	51
1645	後援会長祝辞	綴 1	帝国軍人後援会会長伯爵大隈重信	大正4年12月3日	64	52
1646	奉答	綴 1	帝国在郷軍人会総裁貞愛親王	大正14年12月2日	64	53
1647	令旨	綴 1	帝国在郷軍人会総裁元帥陸軍大将大勲位功二級貞愛親王	大正4年12月3日他	64	54
1648	外地引揚者関係事績	書冊1	青柳村役場	昭和28・29年	64	55